萬葉

昭和五十年六月二十五日發行

萬葉學會

阿騎野の歌二題……吉永登（一）
「風をだに恋ふるはともし」私攷……長谷川信好（二）
分間の浦考……友松孝行（一八）
王勃集と平城宮木簡……東野治之（二四）
中臣祐春筆萬葉集斷簡について……濱口博章（三〇）
豫告……（三三）
萬葉學會會員名簿……（三五）

第八十八號

昭和五十年六月

第八十七號目次

志賀白水郎歌の場……渡瀬昌忠
——歌群の構造論として——
歌語りの方法……伊藤博
「うつせみ」と「たまのを」……森重敏
ねりのむらと……橋本四郎
豫告

阿騎野の歌二題

吉永登

柿本人麿が軽皇子すなわち後の文武天皇の伴をして、阿騎野に狩に出かけた時に作った歌がある。

軽皇子、安騎の野に宿りましし時、柿本朝臣人麻呂の作る歌

やすみしし　わご大君　高照らす　日の皇子　神ながら　神さびせすと　太敷かす　都を置きて　隠口の　泊瀬の山は　真木立つ　荒き山道を　岩が根　禁木おしなべ　坂鳥の　朝越えまして　玉かぎる　夕さり来れば　み雪降る　阿騎の大野に　旗すすき　篠をおしなべ　草枕　旅宿りせす　古へ思ひて（巻一、四五）

短歌

阿騎の野に宿る旅人打ち靡き宿もぬらめやも古へ思ふに（四六）

ま草刈る荒野にはあれどもみち葉の過ぎにし君が形見とぞ来し（四七）

東野炎立所見而反見為者月西渡（四八）

日並皇子の命の馬並めてみ狩立たしし時は来向ふ（四九）

阿騎野の歌二題

とあるのがそれである。

ところでここで取上げたいと思うのは、右の歌全部についてでない。反歌の三番目に原文で出しておいた「東野炎立所見而……」の読みと意味とについてである。

実をいうと、この歌については十年ばかり前、通説の読みにも意味にも従えない旨を論じたことがあった。(注)これはその補説ともいうべきものである。

（注）「東の野にかぎろひの立つ見えて」『国文学』昭和四〇年一二月号（『萬葉―通説を疑う』所収）

一　「傾きぬ」と読むことへの疑い

一

問題の歌を通説では「東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ」と読み、下の句を「西をふりかえると月が傾いてあ

わい光をたたえている」（大系本万葉集）と解している。すなわち諸注は例外なく「ぬ」を読み添えて、これを「傾いている」と訳しているのである。はたしてこれでよいのであろうか。

日本文法大辞典は、「ぬ」について

「ぬ」は「つ」と同様に、主観的には陳述の確かめを、客観的には完了の意を表わす。（同書、六三六ページ）

といい、「……た」「……てしまう」「……てしまった」と訳している。そこには、動作の継続を意味する「……ている」などの訳を納れる余地などあるとは思われない。

それでは問題の「かへり見すれば月傾きぬ」の「ぬ」を、完了として訳したらどうなるであろうか。それは「ふり返って見ると月が傾いた（傾いてしまった）」となって意味をなさないことになる。通説が「月が傾いている」と訳しているのはそのためで、「ぬ」に「ている」と訳す必然性を認めた結果とは思われない。

二

一体「月傾きぬ」を「月が傾いている」と訳すことが出来るのであろうか。萬葉集では、問題の歌を除いて「月傾きぬ」と読ませたものは次の四例がある。

君に恋ひしなへうらぶれわが居れば秋風吹きて月傾きぬ（巻十、二二九八）傾いてしまった

真袖持ち床うち払ひ君待つと居りし間に月傾きぬ（巻十一、二六六七）傾いてしまった

ぬば玉の夜はふけぬらし玉くしげ二上山に月傾きぬ（巻十七、三九五五）傾いた

秋風に今か今かと紐解きてうら待ち居る月傾きぬ（巻二十、四三一一）傾いてしまった

歌の次の口語訳は大系本萬葉集より借りたものである。見れば明らかなように、四例ともに例外なく完了として「た」もしくは「しまった」と訳している。

そこで少し角度を変えて「……ば……ぬ」の形について考えることにしたい。これは例歌が多く、一々挙げる煩に堪えないので、短歌を主にして、四・五の例に限ることにした。

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな（巻一、八）汐もよいぐあいになった

大君は神にしませば天雲の五百重が下にかくり給ひぬ（巻二、二〇五）お隠れになってしまった

少女らがうみ緒かくとふ鹿背の山時し行けば都となりぬ（巻六、一〇五六）都となったことだ

……紐解かず　丸寝をすれば　わが着たる　衣は穢れぬ……

（巻九、一七八七）よれよれになってしまった
富士の嶺のいや遠長き山道をも妹がりといへば日に及ばず来ぬ
（巻十四、三三五六）やって来た

これらも口語訳は大系本萬葉集より借りることにした。いうまでもなく「た」もしくは「しまった」と完了本来の形で訳すものばかりである。

三

ところで、この「ば……ぬ」には特異なものがないでもない。たとえば

冬ごもり　春去り来れば　鳴かざりし　鳥も来鳴きぬ　咲かざりし　花も咲けれど……（巻一、一六）鳴いた（全釈・私注）

春になると、冬の間鳴かなかった鳥も鳴いているし……（全註釈、大系本）鳥も来て鳴く。咲いていなかった花も咲いているが……（小学館本）

のごときもその一つである。この「ぬ」を諸注は、「た」もしくは「ている」と訳しているが、はたしてそれでよいのであろうか。どこか舌足らずであることは蔽えない。

実はこれこそ例の確定条件法の持つ恒常的表現と見るべきで、すなわち「春になると、冬の中は鳴いていなかった鳥も来て鳴きます し、咲いていなかった花も咲きますが……」と解すべきではなかろうか。また「ぬ」「り」二つの完了の助動詞にしても、先行する二つの「も」と共に、鳥の鳴く現象と花の咲く現象とが同時に併行して実現することを意味するものらしく、無意味に用いたものではない。したがって、口語訳も「……鳥も来て鳴いたり、……花も咲いたりしますが……」とする方が忠実といえそうである。

右の略体とも思われるものに

……さ蠅なす　騒く子どもも　打棄てては　死には知らず　見つつあれば　心は燃えぬ……（巻五、八九七）見ていると心は燃え立つ（全釈・私注・大系本・注釈・小学館本などほぼ同じ）
心は燃え立った（全註釈）

などがある。ここでは全註釈を除いては、いずれも形の上では恒常表現ととれる口語訳をしているのは不思議である。あまりにも完了形に訳すことに抵抗を感じたためであろうか。ともあれ口語訳にはあらわれない「ぬ」が用いられているのは、前述併列の「……も……ぬ、……も……ぬ（り）」の形から来たのではないだろうか。略体といったゆえんはそこにある。

ついでにいえば、上に「ば」が先行しないで、「ぬ」だけで恒常的事実をあらわすこともあるようである。すなわち

……いとのきて　短きものを　はし切ると　いへるが如く　し

もと取る　里長が声は　寝屋処まで　来立ち呼ばひぬ……（巻五、八九二）呼び立てている（全釈・全註釈・大系本・注釈ほぼ同じ）呼び立てる（私注・小学館本）

がそれである。このばあいも全釈などが、継続形で訳しているのは当らない。私注などの「寝屋の内まで這入って来て呼び立てる」と解しているのは従うべきである。ほかならぬ恒常表現だからで、私注だけについていえば、はたしてそのことに気付いていたかどうかは疑わしい。

四

問題の「月西渡」を「月傾きぬ」と読むことに抵抗があるとすれば、これをどのように読めばよいのであろうか。もちろん「……ぬ」の形がないというのではない。現に前にも挙げた

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな（巻一、八）

などがある。このばあいも「ぬ」が完了本来の意味で、「た」と訳されていること前述の通りであるが、とにかく「ば……ぬ」の呼応のあることは否めない。

それではどうして問題の歌のばあい、「ば……ぬ」の呼応が許されないのであろうか。とりあえず範囲を「かへり見すれば」のほか同義の「見れば」「国見をすれば」などに限って、萬葉集全体に当ってみることにする。

結果は「見れば……ぬ」の形がなかったわけでない。すなわち

草枕　旅の憂へを　慰もる　こともありやと　（a）筑波嶺に登りて見れば　尾花散る　しづくの田居に　雁金も　寒く来鳴きぬ　新ばりの　鳥羽の淡海も　秋風に　白浪立ちぬ』

（b）筑波嶺の　よけくを見れば　長き日に　思ひ積み来し憂へはやみぬ（巻九、一七五七）

に見える傍線部（a）と（b）とがそれである。まず（a）から考えることにしたい。（a）の部分に関する現行注釈書の口語訳を一瞥すると

筑波山に登って見れば、尾花の散る師付の田に、雁も寒そうに来て鳴いた。新治の鳥羽の湖も、秋風に白浪が立った。（全註釈）

……来て鳴いていった。……白波が立っている。（全釈・大系本ほぼ同じ）

……鳴いている。……立っている。（注釈・小学館本）

などとあってまちまちである。しかし訳文だけで見ていると、「……鳴いている。……立っている」と両方を継続形に解している注釈などの方が少くともまとものようである。そうなると問題の「月西

渡」を「月傾きぬ」と読んで「月が傾いている」と口語に訳する通説を支持することになりそうである。

しかし事実は必ずしもそうではない。今の歌については「見れば……も……鳴きぬ……も……立ちぬ」という形に注目すべきである。すなわち前章で、「……春去り来れば……鳥も来鳴きぬ……花も咲けれど」を取上げた時に触れたように、「も……完了の助動詞」の繰り返しは、二つの事象が時を同じうして起ることを意味するもののようである。それが文章では表現出来ないために前後しているに過ぎない。したがって「鳴いたり……立ったり」の訳も出ることにもなり、さらには継続の意味も加わることになるのではなかろうか。それは完了の助動詞「つ」から出たと思われる助動詞「つつ」や、後の「浮きぬ沈みぬ」「行きつ戻りつ」などを見ても明らかであろう。少くとも「月傾きぬ」のばあいとは同じでない。

次に（b）を取り上げることにする。この部分については、現行注釈書は大体

筑波山のよい景色を見ると、長い間、心に荷って来たわびしさも、すっかりいえた。（大系本・全釈・全註釈・注釈・小学館本など）

と解している。ここにも「見れば……ぬ」の呼応があるが、今のばあい「ぬ」は「た」と解していささかも矛盾がない。すなわち問題の「かへり見すれば月傾きぬ」のばあいとは本質的に相違する。

「月傾きぬ」のばあいは、「かへり見」ることと、「月傾」くことの間には何等因果の関係はない。人麿が「かへり見」ようが見なかろうが、月は時間がたつに従って傾くのである。

しかるに今の「見れば……憂へはやみぬ」のばあいは、「見」ることによって「憂へはや」んだのである。問題の「月傾きぬ」には見られない因果の関係がそこにはある。したがってわたしは、「筑波山のよい景色を見たので、心のとどこおりもやんだ」と訳すべきだろうと思うのであるが、そのことについては別の機会に論じたい。

五

問題の歌の前件「かへり見すれば」と後件「月傾きぬ」との間に因果関係のないことはすでに述べた。ここではそのことを考慮しつつ「見れば」に応じる結びのあり方を整理することにしたい。

A形容詞で結ぶもの

父母を　見れば尊し　妻子見れば　めぐしうつくし……（巻五、八〇〇）

ささ波の志賀津の子らがまかり道の川瀬の道を見ればさぶしも（巻三、二一八）

国々の防人集ひ船乗りて別るを見ればいともすべ無し（巻二十、

四三八一）

B「なり」「如し」のような助動詞で結ぶもの

月見れば同じ国なり山こそは君があたりを隔てたりけれ（巻十八、四〇七三）

岩屋門に立てる松の木汝を見れば昔の人を相見る如し（巻三、三〇九）

C心情をあらわすことばで結ぶもの

伊香児山野辺に咲きたる萩見れば君が家なる尾花し思ほゆ（巻八、一五三三）

紀の国の雑賀の浦に出で見れば海人のともし火浪の間ゆ見ゆ（巻七、一一九四）

以上三つについていえば、Aは結びが形容詞であるから、問題の「月傾」くもしくは「傾きぬ」など動詞または助動詞で結ぶばあいの参考にならない。Bもまた時とは関係がないので無縁であり、Cに至っては心情に関することばで結ばれているので、客観的に月の動きを云々する問題の「傾」くとは本質的に異るものがある。したがっていずれも問題の解決に寄与しないことはいうまでもない。

D動詞の終止形で結ぶもの

逢阪を打出でて見れば近江の海白木綿花に浪立ち渡る（巻十二、三一三八）相坂山を打ち越え出て見ると、……白い木綿花のように波が一面に立っている。（大系本）

大和には　群山あれど　とりよろふ　天の香具山　登り立ち国見をすれば　国原は　煙立ち立つ　海原は　鷗立ち立つ　うまし国ぞ　秋津島　大和の国は（巻一、二）……国見をすると平野には　かまどの煙があちこちから立ち上っている……かもめが盛んに飛び立っている（小学館本）

E存在詞「あり」を含む時の助動詞「り」「たり」「けり」などで結ぶもの

我が背子を今か今かと出で見ればあわ雪降れり庭もほどろにて（巻十、二三二三）……沫雪が降っている。……（大系本）

……古りにし　里にしあれば　国見れど　人も通はず　里見れば　家も荒れたり……（巻六、一〇五九）……家も荒れている。（大系本）

家に来て我が家を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕（巻二、二一六）……寝床の　向きと別な方を向いている。……（小学館本）

昔見し象の小川を今見ればいよよさやけくなりにけるかも（巻三、三一六）……ますますすがすがしく　なって来たことだ（小学館本）

D・Eを通じていえることは、「見れば」に応じる動詞もしくは

時に関する助動詞による結びは、さきにも触れた因果の関係にあるばあいは別として、動詞の終止形か「あり」を含む時の助動詞しかないということである。

動詞の終止形が継続的な意味をあらわすことは、「采女の袖吹き返す飛鳥風都を遠みいたづらに吹く」（巻一、五一）を見ても明らかであろう。また「あり」を含む時の助動詞が継続的な意味を持つことはいうまでもない。かくてD・Eの例歌の下に示した口語訳のように、ことごとくが「ている」もしくは同じ意味のことばで結ぶものばかりということになる。その意味では問題の「月西渡」を通説が「月が傾いている」と訳しているのは間違いでない。しかしその反面「月傾きぬ」の訓が認められないことも明らかになったのではなかろうか。すなわち「かへり見すれば」を含めて「見れば」に応じる動詞もしくは時の助動詞はDもしくはEの二つの型以外は考えられないからである。

かくて一つはDの動詞の終止形で結ぶもので、これに従えば「月傾く」の訓がえられることになろう。しかしこの訓は字足らずであって適当と思われない。契沖のいい出した一訓を生かして、文字のまま「月にしわたる」と読むのも一案であろう。どこまでも「傾く」の訓に執着するならば、Eに従って「月傾けり」と読むよりほかはない。もっとも同じ補うなら動詞「は」を補って「月は傾く」という訓も考えられるがどうであろうか。

二　阿騎野の狩は十一月に行われたものでない

一

犬養孝氏の『萬葉の旅』には、阿騎野の狩は持統六年の十一月十七日（太陽暦の十二月三十一日）に行われたとし、歌の作られたのは午前五時五十五分頃と推定する画家中山正実氏の考証を紹介している。この十二月三十一日は三正綜覧によって換算した結果と一・二日の開きがあるが、そのことは大した問題でない。

中山説の論拠を『大和国史館概説』によってまとめると次のようになる。

1　持統六年（六九二）と断じたのは、萬葉集巻一の配列が時代順になっていることと、日本書紀等の史実考証に拠った。

2　十一月と推定したのは、何もいっていないが、歌詞の「み雪降る」（四五）などを参考にしたようである。

3　十七日と断じたのは、旧暦十一月では、夜明け頃に月が西に傾くのは十七日頃と考えられるからである。

4　午前五時五十五分頃としたのは、「かぎろひ」を曙の日の光と考えたからである。

右のうち1の持統六年説は、今日では通説となっているように思われるのでここでは触れないことにする。また3と4との十七日午前五時五十五分説は、「かぎろひ」をどこまでも陽炎と考えているわたしには前稿を見てもらうよりほかはない。したがってここでは、もっぱら2の十一月狩猟説について考えることにした。

二

阿騎野での狩が陰暦十一月に行われたとする中山説の論拠は前述したように触れるところがない。したがって推測するよりほかに道はないが、これまた前述したように、歌詞の「三雪降る　阿騎の大野に」（四五）などからの推定であろう。

盆地だといっても大和の国である。やたらに雪が降るとは思われない。したがってなるべく冬のさ中にしたい気持もわからないでもない。

しかし一面、軽皇子などはともかくとして、一般従駕の人たちは「阿騎の野に宿る旅人」（四六）として野宿するのである。いくらなんでも雪中に「はた薄　篠をおしなべ」（四五）て旅寝をすることなどあるのであろうか。「み雪降る」が枕詞でないかという説の出るゆえんもそこにある。

それに「はた薄　篠をおしなべ」の「はた薄」からは厳冬の印象は湧いて来そうにない。「はた薄」もしくは「尾花」を読んだ歌はいずれも、季節の明らかなのは秋ばかりだからである。すなわち

めづらしき君が家なるはな薄穂に出づる秋の過ぐらく惜しも
（巻八、一六〇一）

……旗すすき　本葉もそよに　秋風の　吹き来る宵に　天の河白浪しのぎ……（巻十、二〇八九）

秋の野の尾花がうれに鳴く百舌鳥の声聞くらむか片聞けわぎも
（巻十、二一六七）

などと少くない。

もちろんだからといって、これがきめ手になるとは思われない。雪中で野宿はしないという確証があるわけでもなく、「はた薄」にしてもそうである。主として秋のものとせられていたことは事実であろうが、絶対に冬には用いないともいい切れないからである。所詮は水掛論に終るのではなかろうか。

三

窪田空穂はその『萬葉集評釈』の中で無雑作に「鷹狩は冬の事と定まっていた」（同書1八七ページ）といっている。しかし

1……露霜の　秋に至れば　野もさはに　鳥すだけりと　丈夫の友誘いて　鷹はしも　数多あれども　矢形尾の　あが大黒に

白塗りの　鈴取りつけて　朝狩に　五百つ鳥立て……（巻十七、四〇一一）

などを見れば秋に行われていることは明らかであろう。

それでは狩はいつ行われるのであろうか。阿騎野の狩が鷹狩とは限らないので、狩一般について何月に行われているかをしらべるよりほかに方法はない。但し四月、五月の頃に行われる薬草もしくは鹿の若角を採集するいわゆる薬狩は除くことにした。性質も違うし、季節も違うからである。

2（神功摂政元年二月）時に香坂王・忍熊王共に菟餓野に出でて祈狩（うけひ）して曰く、「若し事を成すことあらば、必ず良きししを得む」といふ。（日本書紀）

3（応神二十二年九月）天皇淡路島に狩したまふ。（同右）

4（仁徳四十三年九月）百舌鳥野に幸して遊猟したまふ。時に雌雉さはにたつ。乃ちに鷹を放ちて捕らしむ。（同右）

5（履仲五年九月）天皇淡路島に狩したまふ。（同右）

6（允恭十四年九月）天皇淡路島に猟したまふ。（同右）

7（安康三年十月一日、雄略）天皇人をして市辺押磐皇子のもとにやりて、いつはり、校猟（かり）せむとちぎりたまひて……（同右）

8（雄略二年十月六日）御馬瀬に幸す。虞人に命せて縦に猟す。（同右）

9（雄略四年二月）天皇葛城山に射猟したまふ。（同右）

10（雄略四年八月二十八日）河上小野に幸す。虞人に命せて獣駈（しかり）らしめたまふ。（同右）

11（雄略五年二月）天皇葛城山に校猟したまふ。（同右）

12（天武十年十月）天皇広瀬野に蒐（かり）せむとして、行宮を構り訖りぬ。（同右）

13（天武十二年十月十三日）天皇倉梯に狩したまふ。（同右）

14……み山には　射目たてわたし　朝狩に　しし踏み起し　夕狩に　鳥踏み立てて　馬並めて　み狩ぞ立たす　春の茂野に（巻六、九二六）

15（天平六年三月）丈夫はみ狩に立たし少女らは赤裳裾引く清き浜辺を（巻六、一〇〇一）

16……秋づけば　萩咲き匂ふ　石瀬野に　馬だきゆきて　をちこちに　鳥踏み立て　白塗の　小鈴もゆらに　あはせやり……（巻十九、四一五四）

以上は出来るかざりしらべた結果であるが、大体はつくしたつもりである。それにしても続日本紀になると狩猟の記事がまるで見当らないのは不思議である。記事も多くなったので遊びの要素の多い狩の記事など避けたのでもあろうか。

中にあって続日本紀に一例だけ狩の記事が見つかったが、これは

土屋文明のいうように特別のばあいであるらしい。すなわち天平十二年十一月四日に伊勢の和遅野で行われた狩のことである。この狩は藤原広嗣の乱におびえた聖武天皇が難を東国に避けるための口実として行われたもののようで、続日本紀には

（天平十二年十月二十六日）朕思ふ所あるに縁りて、今月の末、暫く関の東に往かむとす。其の時にあらずと雖も、事已むこと能はず。

といっている。「其の時にあらず」というのは単に行幸のことではあるまい。その目的として標榜する狩のことであろう。取り上げなかったゆえんである。

四

前章で取り上ばた一六例を狩の行われた季節と月との両方からみて行くと下段のようになる。

ところで下段の表が信をおくに足ることは、四月、五月、六月、七月の四か月が〇になっていることである。というのも鷹は換毛のため四月初旬に鳥屋に入れ、七月中旬に出すといわれているからである。したがってこの表を信じるかぎり十一月説を主張する中山説は成立たない。ことに十月に行われている四例のうち日の明らかな三例についていえば、（7）一日であり、（8）六日であり、（13）十三日であって、十一月十七日とは程遠いものがあろう。

月	番号	件数	季節	番号	件数
1月		0	春	14	1
2月	2.9 11	3			
3月	15	1			
4月		0	夏		0
5月		0			
6月		0			
7月		0	秋	1.16	2
8月	10	1			
9月	3.4 5.6	4			
10月	7.8 12.13	4	冬		0
11月		0			
12月		0			

恐らく前にも触れたように「み雪降る」の句にこだわったためだろうが、十一月説については再考の余地があるのではなかろうか。これも前に触れたように枕詞として処理する説もあり、たとえ実景としても初冬の時ならぬ雪と考えられないこともない。

もちろん、何月と推定することは今のわたしには出来ないことである。まして「かぎろひ」陽炎説を主張するわたしに時間の推定などおさらむずかしい。今のわたしにいえることは「はた薄」にすがって秋深い九月か、せいぜい初冬の十月中旬以前であろうというくらいのことである。日については見当もつかないし、時間も強いていえば陽炎の立つ最も早い時間といえようか。

「風をだに恋ふるはともし」私攷

長谷川　信好

一

風をだに恋ふるはともし風をだに来むとし待たば何か歎かむ
（四・四八九）

この歌は前歌（四・四八八）の

君待つとわが恋ひをればわが屋戸の簾動かし秋の風吹く

という「額田王思近江天皇作歌」に対して「鏡王女作歌」とあって、「注釈」（沢瀉）にも云うように「前の作との関係については題詞には何も示されてゐないが、訓釈の条で述べたやうに、前の作をうけて『風をだに云々』と応じた」ものと見るのが一般の解のようであって、①ただ「恋ふ」の語は『恐人尓　恋渡鴨』（六〇〇）、『吾妹児尓　恋乍不有者』（二・一二〇）（中略）などの如く『に』の助詞をうけるのが通例であるにかかはらず、ここには『風乎』と『を』の助詞につづいてゐるので、その解釈についてむつかしい説が見えてゐる。」といっているが（前同）、本歌の解釈には格別「むつかしい説」というほどのものもなく、後述のようにほとんど大同小異のものばかりである。ついで「ヲ恋フ」について「注釈」は「しかしよく見ると『を』をうけるものがないわけでなく、僅かではあるが（中略）の如きものがあり、殊にその対象となるものが主として山や月や島や自然物である事が注意せられ、従って今も『風を』『恋ふ』といふ事は十分認められる。②」と軽く処理している。その他にも、

風をだに恋ふるは――助詞ダニは奈良時代には下に否定・反対・推量・願望などが来るのが例であるから、この歌の表現は違例である。これはセメテ風ダケデモ吹けばよいと願う作者の気持があふれた結果生じた表現なのであろう。（岩波大系本頭注）

とあって、これは「ヲ恋フ」については特にふれるところがなくて、ただ「ダニ」の違例用法についてだけ詳しい。次に、

○恋ふるはともし――「萬葉集」の恋フは格助詞ニを取ってヲをとらない。ゆえにここは「風を待ち恋ふ」の意と解される。（小

学館、萬葉集頭注）

風乎太尓　カゼヲダニ。ダニは他の事は置いて、これだけはの意を現す助詞。動詞恋ふは、助詞ニを受けるものであるが、この歌に在っては、第三句に風をだにと重ね置く関係上ヲを使用してゐる。ニは方向を指し、ヲは問題にする気もちである。（全註釈）

カゼヲダニ　ダニは軽いものを言って、重いものを言外にひびかせる意であるから、風のやうなものでさへ、況して人をばの含みであらう。○コフルハトモシ　恋ひこがれるといふことは淋しく哀れである。風でさへも、況して人なれば一層の意。トモシをウラヤマシの意としたのでは、恋ひするのが羨しいとなるが、それは恋は苦しきものと知らぬ者の言草である。或はコヒといふのは苦しい部分だけを言ふので会ったり寝たりするのはイツクシミ、ウルハシミであって日本の言葉ではコヒとは呼ばないと説明すべきであらうか（私注）

このように、ただ一、二「恋フ」は通例助詞「ニ」をとって「ヲ」をとることは破格または違例であることを指摘する程度で、それも「第三句に風をだにと重ねて置く関係上ヲ使用してゐる」（全註釈）としたり、「『風をだに恋ふるは乏し』と御妹の方を云って一段とし、『風をだに……歎かむ』と同じく『風をだに』を繰返して（中略）相対させ」（評釈）たものとし、「宣長云、三の句の風をだには、上なる詞を重ねたるのみ也。風をだに恋ふるはともしといふ二句を重ねていふ意也といへり。」（古義、略解、新考）と、いわば三句との語呂合せによるものとするが如き以上には特別に問題視するものを見ない。③ 要するにいずれも「風をだに恋ふるは」は「風にだに恋ふるは」と等価と見ているようである。次に見るような本歌の解釈がそのことを証するものと見てよかろう。

風にでも心惹かれるといふ事は羨しい。風でも来ようと待つならば何を歎きませうか。（注釈）

風だけでも恋しく思っておいでなのはうらやましい。せめて風だけでも来るだろうと待っていられるなら、何の歎くことがあろう。（私には風さえも吹いて来はしないのです。）（岩波大系本）

風をでも、待ち恋うているとは羨しい。まして風をでも来るだろうと待ち恋うているのだったら何を嘆くことがありましょう。（小学館、萬葉集）

風だけでも待ち恋ふるのは羨しい。風だけでも来るだらうと待つならば何も歎くことは無いのだ。（全註釈）

風の様なものでさへも恋ひするのはさびしい。しかし其の風の様なものさへも、来ると極まって待つなら何に嘆きませう。（私注）

歌意は、簾動之秋風吹とて風を愛賞賜（メデウツクシ）ふは、うらやましきこと

にぞ侍る。われは夫君の来坐む前兆（シルシ）の風だに吹かねば甚うき事なり。其風をたのみて、君の来坐むを待ば何かは嘆くべきことのあらむとなり。（古義）

必来むものと思て待たば、何かは嘆べき。風だに恋ふる時は乏しくて、必しも来ぬ故になげく也。（略解）

二

以上のように、従来一般に本歌において初句「風をだに」は直接「恋ふる」につづくものとして解釈しようとするため、「風に心惹かれ」たり、「風を恋しく思った」り、「風を待ち恋う」たり「風に心動か」したり、「風をメデウツクシ」んだり、それぞれ工夫のあとが見られ更には、「あなたは風に誑かされたと仰しゃるが、あなたの方にはお見えになるといふたよりがあるから、風にさへ欺かれて入らっしゃるので」（折口、口訳萬葉集）といったような途方もない訳までとび出す始末でさえあった。

本歌が何らかの意味で前歌（四八八）と関連することは否定できないとおもわれるとしても、一体前歌の「わが屋戸の簾動かし秋の風吹く」を諸注釈のように「風ヲ恋フ」ものと解するのが果たして正解であろうか。

戸口の簾を動かすものがあるので、正に君かと思って見ると、それは秋風であるといふので（窪田評釈）

戸口の簾の動くのをそれかと見れば君で無くて徒に秋風が吹いて来たのであった。（全註釈）

早秋の風は親しまれ待たれるものであらうから、此の一首も其の爽快な秋風の先づ訪れるのを感じながら、満足した心で人を待つ趣と解される。（私注）

表現・内容ともに、中国の「夜相思フ、風ノ窓ノ簾ヲ吹キテ動カセバ、コレ歓（ウレ）シキ所（ヒト）ノ来シカト思フ」（清商曲辞『呉声歌』）という詩に酷似している。たぶんこの詩の影響のもとに詠まれた歌であろう。（岩波大系本）

等々、失望、満足の差違こそあれ、前歌の理解は、せいぜいこの範囲を出ないと考えてよかろうとおもう。にも拘わらず、本歌の解釈となると、なぜ揃いも揃って、その前歌が「風ヲ恋フ」ものと解されることになるのであろう。これでは前歌の意味を全くすりかえてしまうことになるではないか。これというのも従来、本歌の上二句「風をだに恋ふるはともし」を前述のように、いずれも「風ヲ」＝「恋フ」ものとばかり考えられて来たためではないか。そのことがまた「ダニ」の用法までを「助詞ダニは、下に打消・命令・推量・仮定・願望などの表現を伴うのが原則であるが、ここではスラと同じくらいの意に用いてある。」（小学館）とか「助詞ダニは奈良時代は下

「風をだに恋ふるはともし」私攷

に否定・反語・推量・願望など来るのが例であるから、この歌の表現は違例である。これはセメテ風ダケデモ吹けばよいと願う云々」（大系本）、また「だに」は「『明日だに見む』（二・一九八）などあり、だけでも、といふ程の意。この句は前の作をうけた句で、待つ君はいらっしゃらなくとも、風だけでもそれに心惹かれるといふ事は羨ましい、といふのである。」（注釈）のごとく何とか辻褄を合わせようと苦心しているかのようである。

三

わたしはかねてから前歌と本歌の間に解釈上、何となくしっくりしない、ある種の違和感のようなものを感じていた。しかし上に見てきたごとくいずれもわたしのこの疑問について納得のいくような注解が得られないということは、おもうにそれは従来本歌の上二句を

風をだに　恋ふるは　ともし

の文構造のものと考えて、専らその見地からばかり解釈がなされていたからではなかろうか。しかし右のように「風をだに」を「恋ふる」の連用修飾語（客語）と考える限り、四八八・四八九の両歌の解釈がうまくかみ合わないのは当然である。こうした固定観念にあまりにも、みな執しすぎているようである。ここのところを、いま一度自由虚心に見なおして見るべきだとおもう。そしてこれをわたしは、

風をだに　恋ふるは　ともし＝恋ふるは　風をだに　ともし

のように考えるべきではないかとおもうのである。従来は「風をだに」をすぐ「恋ふるは」につづけようとするために、「風ヲ恋フ」が問題となったり、また「ダニ」を破格違例視することにもなったのである。「風をだに」を「ともし」につづけて「風ヲトモシ」と見ることは、

難波潟潮干の波残飽くまでに人の見る児をわれしともしも（四・五三三）

海山も隔たらなくに何しかも目言をだにもここだともしき（四・六八九）

のような類型歌④があって、

人の見る児を　われし　ともしも
風をだに　恋ふるは　ともし
目言をだにも（ここだ）　ともしき

このように三歌を対照すれば、「風をだに」は「恋ふるは」でな

くて、「ともし」につづくと見るのが、正しいことは明らかであろう。

「ともし」の語は「少ない、十分でない、足りない」状態を表わすのが原義であって、その「少ない、十分でない、足りない」ものが、「恋しい、いとしい、慕わしい」の意になったり、またはそれが他者に十分に、足りていることから「羨ましい」の意になったりもするのである。五三三番歌は、「……思う存分に人の見る児が、本当にわたしは恋しい」と解釈すれば、それは「児」を中心にして言う場合で、自分が十分（見ることが）出来ないことを人が出来るということを主にすれば、「その児を思う存分人の見るのが羨ましい」となる。六八九番歌も、「逢って話すのでさえが大へん少ない」の意で、それが出来たら目言でさえ私には「羨ましい」ことになろう。

要するに、ケースバイケースで「十分でない、少ない」とも「慕わしい、恋しい」とも「羨ましい」ともいいかえるにすぎない。

本歌の場合も、「恋ふるは」は「恋うものとしては、恋うものといえば」の意で、

風（の訪れ）でさえ、（私には）ともしい、十分でない。
風（の訪れ）でさえ、（私には）慕わしい、恋しい。
風（の訪れ）でさえ、（私には）羨ましい。

「風をだに恋ふるはともし」私攷

となる。[5] いずれにしても本歌の「風をだに」に下接するものは、「恋ふるは」でなくて「ともし」と見るべきで、[6] 諸説のように「恋ふるは」とするのは何としても無理ではなかろうか。だからこそ前歌（四八八）の結句「秋の風吹く」を「風にでも心惹かれる」、「風だけでも恋しく思っておいでな」、「風をでも待ち恋っている」等々とみな強引な解釈をせざるを得なかったのである。「秋の風吹く」はどこまでも「秋の風吹く」だけのことでそれ以上はむしろ恣意的な曲解となろう。従って素直にそれをうけて本歌を、（秋風が吹いて来るとあなたのおっしゃるそのような）風（の訪れ）でさえ（私には）羨ましい。と解すればよいのではないか。

本歌一首全体を、つぎに意訳し見ると、

訪れて来る何のあてもない私には、恋うものといえば、秋風が吹いて来ると、あなたのおっしゃるそのような風（の訪れ）でさえ、羨ましゅうございます。私にせめて風だけでも訪れて来るようなあてがあるなら、なんで歎いたりいたしましょう。（私には風でさえ訪れては来ないのです。）

と、こんな風にでもなろうか。

さて因みに、「だに」について、岩波文学大系本に、

朝井堤に来鳴く貌鳥汝だにも君に恋ふれや時終へず鳴く（十・一八二三）

「風をだに恋ふるはともし」私攷

に関して次のような補注が見られる。

汝だにも　ダニに萬葉集では多く体言について、ダケデモ、セメテ……ダケデモの意を表わしている。そして、下の、否定・反語・仮定・意志・命令・願望と呼応することが多い。

下の否定・反語と呼応する例はダケデモと訳してあたることが多い。その例を一つあげる。

うぐひすの声だに聞かず（巻十七、三九六九）

仮定・命令・願望などと呼応する場合はセメテ……ダケデモと訳してあたる。これらについては第一冊補注「雲だにも」の項に記した。しかし萬葉集のダニには、平安時代に現われる用法の先駆的なものが見えているので補注しておく。

この歌（一八二三）の汝ダニモの例の如きは、ダケデモ、セメテ……ダケデモと訳したのではあたらないのであって、お前まで。も、と訳すべく、巻十四、三三八三の「斯くだにも国の遠かば汝が目欲りせむ」も同様である。「これほどまでも国が遠かったら」というべきである。こういうダニの用法は、平安時代には増加し、「かゝることだにあり」のような例が見える。こうしたことまであるの意である。その先駆的な例はすでに奈良朝にあることを記しておく。

この補注に見えるような「ダニ」の用法は、本歌の場合にも通用することが考えられる。[7]「恋うものといえば、風（の訪れ）までも羨ましいのです。……（私には風までも訪れては来ないのです。）」という風に。その場合「でさえ」から「までも」へとその語意は一層強化されて、それだけ鏡女王の歎きは一段と深刻さを加えることになる。そしてそのことは同時に「風をだに」と「ともし」との連繋の緊密さをより明確に、そして必至なものであることを証することともなろう。

これを要するに、本歌の初句は従来の諸説が、これを「恋ふるは」に直結するものと解するのに対して、それを隔てた「ともし」に接続させて、「風をだにともし」の意に解すべしとする試解を新しくここに提起して大方の叱正を仰ぎたいとおもう。

注①　明らかに前歌に和えた歌とするもの（古義・窪田評釈）、和歌とも独立歌とも解されるとするもの（私注）、前歌を見聞しての詠歌と見るもの（略解・全釈）、本歌の内容よりして前歌との関係が確認できるとするもの（全註釈）その他特にことわることなくても、本歌の解釈から両歌の関係を当然予想していると考えられるもの等々、かなり幅はあるにしても、全く無関係と見るものはない。

②　「ヲ恋フ」の確かな用例は、一七〇五・二四四九・二九八三・四三七一の四歌でその中二例は自然物で、他の二例は人

である。自然物と人と半々である。

③　「作者は、額田王の歌を受けて、まず「風をだに来むとし待たば何か歎かむ」という下三句からこの歌を作りはじめた。上二句にダニ・ヲ恋フなど文法的破格がいちじるしいのは、先にできた下三句に語調をそろえながら、あとから加えられたものであることを示しているように思われる。」（小学館・萬葉集）

この評言は随分冒険な推論であって、結局上二句を「風ヲ恋フ」の意に解する前提に立ってのことであって、後述するように上二句を「風ヲトモシ」と考える時は成立しないことになる。

④　四六〇（「人言をよしと」）以下五四三・八九三・九六六・二三〇三・二三六二・三二六五等同型歌がある。

⑤　本文の外に、「恋ふるは」を恋する主体ととって「恋う身としては、恋する身についていえば」、風の（訪れ）でさえ、ともしい、十分でない。……慕わしい、恋しい。……羨ましい。

のように考えてもよかろうとおもうが、一応本文のように解しておきたい。

⑥　本攷のように、「ともし」を直接「風をだに」に下接させて考えると、これは「ヲ＋形容詞」型の構文となって、萬・一三歌を「香具山は　畝火を愛しと」と解すると、これも同型であって、「畝火を　香具山は　愛し」また「恋ふるは風をだに　ともし」という風にそれぞれ言いかえられて、基本的には、「象は鼻が長い」の文構造をとるものと考えてよい。

「風をだに恋ふるはともし」私攷

⑦　岩波大系本は本歌の「ダニ」については、これを例外と注記するだけで、多くを語っていないが、本歌も一八二三歌と同じ用例歌の一つに加えてしかるべきでなかろうか。

分間の浦考

友松孝行

一

『萬葉集』巻十五の遣新羅使人の歌の中に

佐婆の海中にして忽ちに逆風に遭ひ、漲へる浪に漂流す。

経宿りて後に幸に順風を得、豊前国下毛郡の分間の浦に到着す。ここに艱難を追ひて怛み悽惆して作る歌八首

大君の命恐み大舟の行きのまにまに宿りするかも（三六四四）

右の一首、雪宅麻呂（以下七首略）

とあり、当時豊前国下毛郡に「分間の浦」と呼ばれる地名があったことが知られる。しかしその位置については諸説があり、はっきりしたことはわからない。

従来の説を大別すればおおむね次の三つになろう。

1　大分県下毛郡和田村和間、同今津町附近の海岸附近かといふ。〔萬葉集事典〕

2　中津市田尻から今津にかけての海辺のうちか。間々崎また和間のあたりという。不明。〔古典大系本〕

3　分間浦は、今の大分県下毛郡桜洲村今津の近くに間間崎の地名が残って居るので、ここに分間とあるのは、万間の誤で、浦は今津の港湾を指すのであらうといふ。〔萬葉集私注〕

これらの擬する「分間の浦」は、今日の田尻、和間あるいは今津の一帯を漠然とさしているようで、いずれも他人の説によったと思われ、確信あっての推測ではなかろう。すなわち、この田尻・和間・今津の三地区はおのおの距離的に隔たりがあり、また、2・3は間々崎（ないし間間崎）という地名が現存するかのようにいうが、現在それを的確に示しがたいこと、間々崎と「分間の浦」との関連、など未解決のままである。

そういう私にも断定的なことは言えないが、多少この地にあって渉猟しつつ考え来たったことを述べてみたい。

二

まず豊前国下毛郡分間の浦と推定されている中津市付近の地形について『太宰管内志』の記すところを見よう。

〔和名抄〕に下毛郡、山国・大家・麻生・野仲・諫山・穴石・小楠已上七郷なり、〔寛知集〕に下毛郡六十四村云々などあり、次に方位は東方宇佐郡となり、西は田河・築城・仲津三郡となり、北は海又上毛郡に隣り、南は豊後国玖珠・日田二郡となりて、南北八里東西二里半許あり、北方に平地多く、南方に大山多し、又郡ノ西に高瀬ノ大河あり（以下略）。

このうちの「高瀬ノ大河」とは、中津市の西、現在大分県と福岡県との界をなす山国川をさし、その河口近くに「倉無の浜」（一七一〇）の跡といわれる闇無浜神社がある。これに対して、「分間の浦」に擬せられている今津・和間・田尻の一帯は中津市の東部にあり、『中津市史』によれば、『和名抄』にいう下毛郡小楠郷に属していたもののようである。明治十七年八月の太政官布告の郡町村編成法の再改正などにより中津町に組織され、やがて中津市となった。

この中津の東西両端を結ぶ海岸線が今日見るような形になったのは近世以降のことらしく、その間に相つぐ干拓がなされたことは同『中津市史』によって知ることができる。

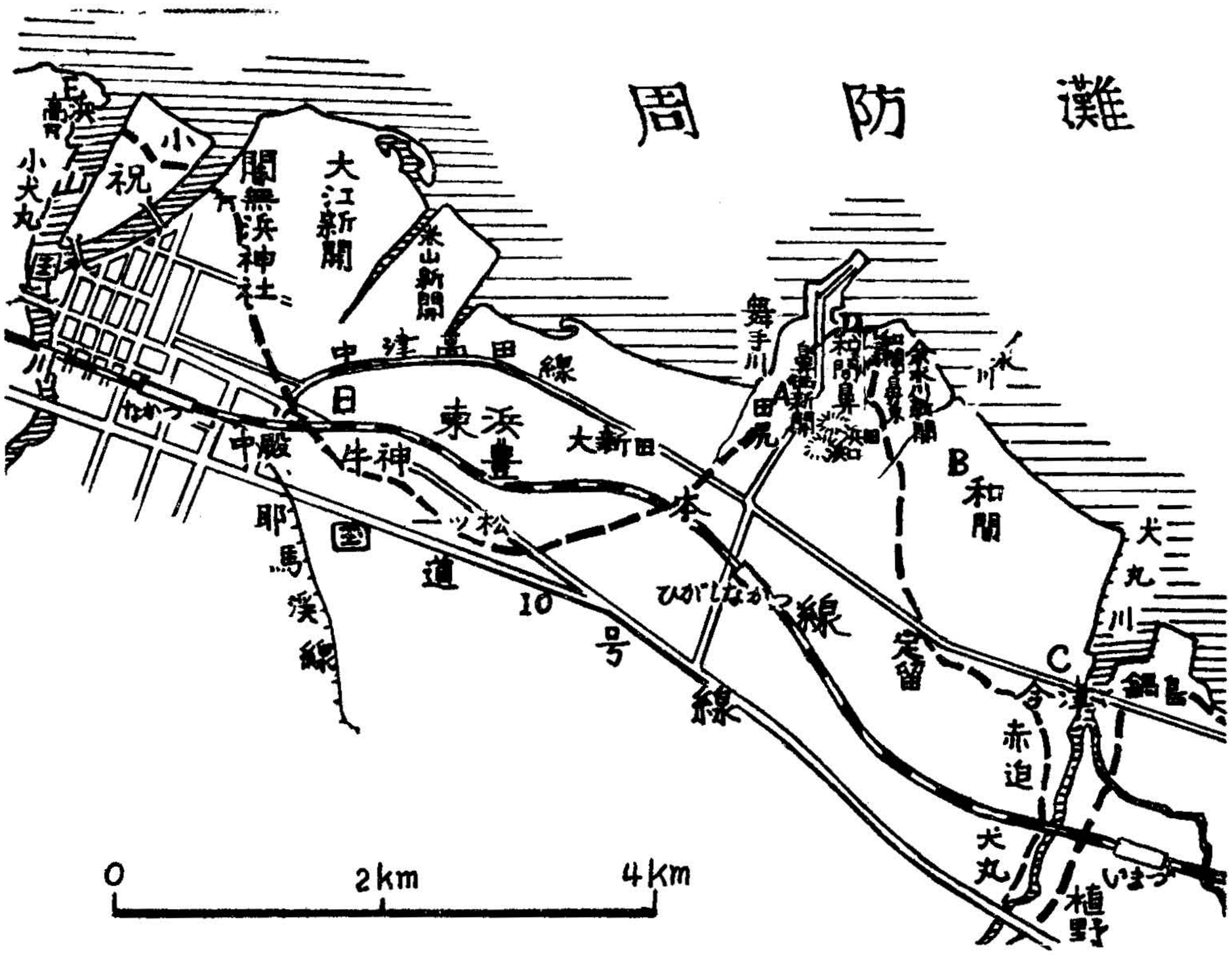
中世までの海岸線は今日の陸地の奥にあり、旧国道中殿、牛神、一ツ松辺が海岸線であったと思われる。江戸時代より盛んに干拓による新田開発が行なわれ、平野は漸次拡大した。新市域の三保、今津（今津、鍋島、赤迫、犬丸、植野等を含む一帯）、和田（田尻、和間、定留）は旧耶馬熔岩流の末端が丘陵を作り、現中津市の最高所（十七・八メートル）をなし、和田方面では下毛原洪積台地が田尻の北方にまで達し、今津の鍋島における長峰台地と同様、海岸近くまでせまっていた。〔要旨。（　）内は友松の補足〕

これによれば、中世以前のこの一帯の海岸の地形は、現在のそれと相当異なった相貌を呈していたと思われる。

この夏、田尻・和間の実地調査を試みたおり、田尻の旧家で現在医院を開いている田尻清之助氏から田尻の小字名を記した明治二十二年製作の地図を示された。この地図を見てもこの一帯の干拓の跡は顕著で、「鼻西新開（はなにししんかい）」「和間ヶ鼻東」「余水川新開」などの新地名が海岸に並び、海岸が近世末期の頃急に北に押し進められたものらしいことを知った。

そこで私は、今津一帯、定留、田尻付近の地形の実地調査を数回試み、またこの付近の地理に明るい島田義典氏の意見を参考にして、中世以前の海岸線を推定したのが次の地図に示した――線である。現在よりも相当南側まで入り込んでいたもののようである。

このうちとくに今津付近において地形の変化が大きく、赤迫（あかさこ）のあたりまでも後退していたのではないか。というのは、今津で海に注



いでいる犬丸川はその運搬する土砂のために自らの川幅を狭めかつ沖の方まで沖積地を広げて行った。鍋島・植野また犬丸に古墳や貝塚・遺跡の類があるが、それらは現在の河口からよほど離れた場所でしかなく、今津（地図C）にはその類が一か所もない。以上述べたことをもとにしながら「分間の浦」の所在地について考えてみたい。

三

上の地図を見ればわかるように、さきの『萬葉集事典』（1）の指摘する分間の浦はBないしCだが、『古典大系本』（2）は、不明としながらもA～Cと広範囲で、間々崎または和間（B）のあたりとする説を掲げている。『萬葉集私注』（3）はCとする。しかし私の臆測に誤りがないならば、（1）（2）（3）とも『大日本地名辞書』の記述から出たものである。その『大日本地名辞書』には次のようにある。

今津（イマツ）　今桜洲村と改称す、郡（下毛郡）の東北隅にして、宇佐郡界なる海駅なり、小港湾あり、又鉄道車駅とす。（古の万間浦なるべし）（中略）

間間埼（ママ）　今和田村大字田尻の砂觜なり、今津の西北とす、豊前志に萬葉なる下毛郡分間浦は万間浦の誤にて、即此地ならんと論

ぜり、（後略）

この『地名辞書』の記載は人惑わせである。はじめ今津を「万間浦」なるべし、と言っておきながら、あとでは『豊前志』の間間崎分間浦説を引いている。注釈書が迷うのも当然である。

その渡辺重春の著『豊前志』の記述はこうなっている。

間々濱

田尻村の海濱なり。（中略）

重春云、此の分間を昔より誰もワマと訓めるはいかにぞや。分をワと訓むべきやう無し。ワカル、ワカツのカル、カツを省きてワとのみ云ふ事、古言に例なき事なるをや。故、按ふに分は万の字に書體の似たるより書き違へしものにて、万間なるべく所思ゆ。（後略）

そこで私は「間々浜」を求めて、今津の地に赴いた。その結果、今津にはついにママの地名を聞くことができなかった。そして後述するが、田尻に「間々浜」と呼ばれる地を見付けることができた。おそらく『地名辞書』の「（古の万間浦なるべし）」というのは誤りであろう。

また私は『太宰管内志』所収の「津城永寶記」を見た。それには、

分間ノ崎は、下毛郡新田村東濱村ノ地より□万ノ海中に指出たる崎を云なり。

とあり、□は「東」などの方角をさす字であったろう。田尻は標高一〇メートル前後の高さで、中津駅の東、東浜の地から真東に見渡される。それに反して、和間や今津は東浜から見通せない。

同じ『管内志』にまた

〔森氏云〕、下毛郡分間と、吹出ノ高濱と、相對へる、其間凡二里許にして、入ぬる磯のさま、たとへば箕ノ腰の如くに曲れり、其内に倉無濱などもありて、面白き處なり、（下略）

という記述がみられる。吹出の浜は、現在の福岡県築上郡吉富町高浜で、『豊前志』に、

吹出濱

夫木集云、『秋の夜はさぞ寒からし浦風の吹出の濱の千鳥鳴くなり』（下略）

と載せられている。

この吹出の浜と田尻の突端部との間はおよそ八キロ、正しく箕の腰のように海岸は湾曲していたろうことは、前に引いた『中津市史』の記事からも推定できる。

以上のことから、「分間の浦」は和間・今津などでなく、田尻の地であろうということはほとんど間違いなかろう。

私は『豊前志』の、分間浦は間間浜であるという説に賛同し、間間浜なる地が田尻にあることを述べたが、その間間浜とは田尻のどの辺にあたるのであろうか。

さきにもいったが、田尻に「まま浜」という呼び名があったのである。前述の田尻清之助氏は地図でDと印した土地を示された。このD地は田尻の北の突端で、現在堤防になっている。この地に行く道幅は約四メートル、道の両側には樹齢七、八十年にもなろうかと思われる四、五十本の松が茂っている。まわりは水田、でなければ塵芥の捨て場である。

田尻氏の話によれば、氏が子供の頃、よくこの地で遊んだとのことで、余水神社の奉納地図によると、「和間鼻」ということになっているが、通称の名は「まま浜」である。この和間鼻は、東の「余水川新開」・「和間ケ鼻東」と西の「鼻西（はなにし）新開」とに挟まれたような恰好になっている。

私は干拓の行なわれる以前の姿を探し求め、奉納地図に記入されている小字名の「恵良」「浜田」「浜口」の辺を調査したところ、浜田のあたりで、粘土質土壌の赤土の上に多量の砂がかぶさっている部分を見付けた。おそらく開発以前の海岸であったろう。長さ約二十メートルばかりで東西に連なっていた。

鼻西新開・和間ケ鼻東・余水川新開と呼ばれている地は、豊前海特有の遠浅の海で、満潮時には水辺と化し、干潮時には干潟をなしていたであろう。和間鼻は私の想像では、浜田から四百メートルも海に突き出た相当に長い「沙觜」であったに違いない。そして『豊前志』のいう「間々浜」は、この和間鼻から浜田・浜口の、田尻西野にかけて南西に延びた海浜であったのだろう。

しかしこの遣新羅使人たちが船を停めて「浮き寝」（三六四九）をしたのは、右にいう和間鼻の西側（すなわち現在の中津市街地のある方）か東側か、その点がはっきりしない。一行は、瀬戸内海を山陽道沿いに西航し、関門海峡を抜けて博多に到着する予定であった。それが周防の佐婆郡のあたりで逆風にあい、一晩漂流した後、順風を得てこの豊前の「分間の浦」に到着したといっている。この逆風・順風は八月上旬の季節と周防灘の風向を考慮すると、この時の「逆風」は西風ないし北西の風であったろうし、「順風」は東風ないし北東の風であろう。そのことを思えば、天気は回復してもなお波は荒かったであろうから西側に停泊した。つまり「分間の浦」も西側であったと推定できるのではなかろうか。

あるいは、この時の八首の歌のうち

海原の沖辺に燈しいざる火は明かして燈せ大和島見む（三六四八）

ぬばたまの夜渡る月ははやも出でぬかも海原の八十島の上ゆ妹があたり見む（三六五一）

の趣から、作者は東の空を望んでいると考えられ、その位置は和間鼻の東側ではないか、ということも考えられなくはない。しかしさきに見たようにこの和間鼻は細長い砂嘴で高さもいくばくもなかった。まして夜中の詠である。これらの歌で砂嘴のどちら側かを判断するにとは適切でなかろう。むしろ「分間の浦」とある以上、「浦、和名宇良、大川旁曲渚、船隠レ風所也」（和名抄）という条件を具えていなければならない。「大川」こそないが、「分間の浦」は渚が湾曲し、風待ちする所であったはずで、やはり和間鼻の西側であったと推定しておそらく誤りはないであろう。

五

最後に「分間の浦」の読み方について考えてみたい。現在『萬葉集』の注釈書の類はすべて、「分間」をワクマと読んでいる。文字に即するかぎり当然のことである。

しかし『太宰管内志』の地名の欄には、

分間（ワマ）ノ浦

とし

〔渡邊氏云〕、分間浦、今もワマノウラとも、マ、ノウラとも云なり、古はワマとぞ唱へたりけむ、

とある。一方またママとも読んでいる。同書、豊前之七「分間（ワマ）ノ浦」の項の文中に

分間は麻（マ）末と訓ムべし、

とある。しかし『豊前志』のいうように、ワカル、ワカツのカル、カツを省いてワとだけいうことが語法的に可能かどうか、という点で疑問が残る。むしろ「和間」という地名が現存するのでそれに合わせたのであろう、と考えられる。一方間崎という地名に合わせて「分」を「万」の誤字と考えるのもはたしてどうであろうか。かりに「万間」というのが正しいといっても、「万」は音仮名、「間」は訓仮名、そのような音訓交用の地名表記も「佐穂」（六六三）「伊駒」（三〇三二）などのように稀にはあるが、可能性としては低いように思う。ワクマと読むのはその点無理がない。

今のところ、その読み方を明らかにできないという一点だけを憾みとする。

〔付記〕この小稿を成すにあたって、木下正俊先生のご助言を頂いた。厚く御礼申し上げます。

王勃集と平城宮木簡

東野治之

一

平城宮址で発掘された木簡には、詩歌や漢籍の一部をすさび書きしたり、習書したものが散見する。これらは上代の文学のみならず、文化を考える上にも注目すべき資料であって、既に言及されているものが少なくない。[1] 私もかって文選李善注の存在を指摘したことがあったが、[2] 最近新たに王勃集の断片を見出したので、これをめぐって聊か鄙見を述べてみることにしたい。

二

いうまでもなく王勃集は、駱賓王・楊炯・盧照隣とならんで初唐の四傑といわれた詩人王勃（王子安）の詩文集である。[3] 我国には、唐鈔本の残巻[4]や慶雲四年の奥書を有する正倉院蔵の残巻[5]が伝わっており、早くから将来されていたらしい。本書が、奈良時代の詩歌、わけても詩序・歌序の表現に与えた影響は極めて大きなものがあり、文選・玉台新詠など六朝の詩文集とともに、上代文学史上看過できない書とされている。[6]

ところで平城宮址出土の木簡に、左のような文字を記した断片が存する。[7]

(一) □□□風景於也（易断惜カ）　（木簡番号五八二）
(二) 惜風□□（景於カ）　（同　五八三）
(三) 滑稽権大滑□□（稽カ）　（同　五八一）

この内容が、官衙の事務に関するものでないことは一見して明らかであろう。実はこれらは、王勃作の詩序の一つ、「初春於権大宅宴序」を習い書きしたものに他ならない。この詩序は、通行の輯本王子安集[8]には収められていないが、正倉院蔵の旧鈔本にその全文が残る。いまそれによって詩序の全文を示そう。[9]

初春於権大宅宴序

早春上月、連襟扼腕、梅柳変而新歳芳、道術斉而故人聚、羇心易断、惜風景於他郷、勝友難遭、尽歓娯於此席、

(イ)　(ロ)

士、倜儻高才、博我以文章、期我以久要、大夫之風雲暗相許、国士之懐抱深相知、大開琴酒之筵、遠命珪璋之客、則有僧中竜象、支道林之聡明、物外英奇、劉真長之体道、張生博物、仁遠乎哉、揚子草玄、吾知之矣、臨春風而対春、(脱字カ)接蘭友而坐蘭室、散孤憤於談叢、寄窮愁於天漢、情飛調逸、楽極興酣、方欲粉飾襟神、激揚視聴、翫山川之物色、賞区宇之烟霞、文不在茲、請命蛟竜之筆、詩以言志、可飛白鳳之詞、凡我友人、皆成四韻

(初春、権大宅にして宴する序

早春の上月、襟を連ね腕を扼る。梅と柳とは変まりて新歳芳しく、道術斉して故人聚ふ。羈心断つこと易く、風景を他郷に惜しむ。勝友遭ふこと難く、歓娯を此の席に尽くす。権大官い骨稽名士、倜儻高才、我を博むるに文章を以ちてし、我に期つに久要を以ちてす。大夫の風雲暗く相許し、国士の懐抱深く相知る。大きに琴酒の筵を開き、遠に珪璋の客を命く。則ち僧中の竜象、支道林が聡明あり、物外の英奇、劉真長が体道有り。張生が博物、仁遠なるかも、揚子が草玄、吾これを知れるぞ。春風に臨みて春□に対ひ、蘭友に接りて蘭堂に坐。孤憤を談叢に散き、窮愁を天漢に寄す。情飛び調逸り、楽極まり興酣なり。方に襟神を粉飾し、視聴を激揚し、山川の物色を翫び、区宇の烟霞を賞さむと欲りす。文は茲に在らず、蛟竜の筆を命ぜむこ

とを請ふ、詩は以ちて志を言ふ、白鳳の詞を飛ばす可し。凡そ我友人、皆四韻を成したまへ。)

前掲の木簡㈠㈡は、傍線部(イ)そのままであり、㈢は傍線部(ロ)を適宜習い書きしたものである。(10) ㈠㈡だけでは、他の漢籍に類句がないとはいいきれないが、傍線部(ロ)の「権大官」は、詩序の題にも「権大宅」とある通り、特定の人物をさしており、これが木簡㈢にみえる以上、㈠〜㈢がすべてこの詩序の断片であることは疑う余地がなかろう。(11)

この詩序は、王勃集を通じて、奈良時代の貴族や文人の眼にとまっていたに違いない。例えば懐風藻所収の詩には、次のような類似の語句がみえている。(上段は王勃「初春於権大宅宴序」、下段は懐風藻の詩)(12)

(1)尽歓娯於此席　　礼楽備而朝野得歓。娯。之致(65序)
　　雖歓。娯。未尽(83序)　尽。歓。情於。此。地(94序)

(2)博我以文章、期我以久要　　酔。我。以五。千之文、既舞踏於飽徳之地、博。我。以。三百之什、且狂簡於叙志之場(52序)

(3)大開琴酒之筵、遠命珪璋之客　　琴。酒。開。芳苑(38)　西園開。曲。席、東閣引珪。璋。(66)

(4)散孤憤於談叢　攀桂登談叢。(60)
(5)請命蛟竜之筆　請写西園之遊(52序)
(6)飛白鳳之詞　請染翰操紙(65序)
(7)皆成四韻　飛西傷之華篇(65序)
　宜裁四韻、各述所懐(94序)

この中には、(5)(7)などのように、類似の表現が他の詩序にもしばしばみえるものがあり、懐風藻の類句がすべて直接にこの詩序に基くとは言い難い。しかしこれらの表現が、他の詩序の語句と相俟って奈良時代人の述作の糧となったことは認めてよいであろうし、(2)の場合などは、やはり直接の影響関係が想定できるのではあるまいか。(13) 上記の木簡も、王勃集の完本に存したこの詩序を習い書きしたものと考えられる。

三

王勃集の木簡は、書かれた環境が明らかな点で、本書の流布を考える上に貴重な手がかりを提供する。

これらの断片は、平城宮第二次内裏の外郭にあったごみ捨て用の穴から、多数の木製品・土器などと共に出土した。併出した木簡の年紀や遺物の出土状況から考えて、この穴が使用されたのは、天平十七〜十九年頃に限られるという。(14) 併出した木簡は、荷札の類を除けば、官衙で事務処理に用いた文書・帳簿などであって、特に西宮(内裏)の守衛に当った兵衛関係のものが多く、付近に兵衛の詰所の存在が推定されている。(15) 王勃集の断片も、平素木簡を扱っていた下級の官人によって、ほぼこの頃に書かれたものと考えなければならない。同じ穴からは、文選李善注を習書した木簡も出ているが、(16) 天平末年には、文選などとならんで王勃の詩文も、下級官人の翫ぶところとなっていたことが知られるであろう。内容の理解がどの程度なされたかは不明であるとしても、王勃集の流行が、少数の貴族・文人にとどまらなかったことは確実と思われる。

ここに思いおこされるのは、正倉院文書(続修三二)の余白に残された七夕詩の序の楽書である。(17)

孟秋良辰、七夕清節、涼気初升、素露方凝、鳴蟬驚於園柳、金螢焼於砌草、于時紛綸風士、酌滲(18)之吉日、倩盼淑女、穿針之良夜、当此時也、豈得投筆、人取一字、各成二韻

この序と七夕詩は、天平十六年頃、皇后宮職の舎人で金光明寺写経所の写経生・校生をしていた辛国連人成によって書かれた。(19) この詩序には和臭をもった表現がみとめられ、また詩には、藤原不比等の七夕詩と同一の句を用いたところがあるから、(20) 人成自身の作とは断定できないまでも、邦人の作であることに疑問はなかろう。

小島博士の研究にも明らかなように、この詩序には、王勃をはじ

めとする初唐詩人の詩序の影響が特に著しい。[21] 舎人・写経生のような下級官人が、かかる序を伴った詩を試みた背景には、前述のような趨勢が存在していたとみるべきである。

王勃集の内容は、官人が文章の手本とするには必ずしもふさわしいとはいえず、また大学寮等でその読習が義務づけられていたわけでもなかった。このような典籍が、たとえ部分的にせよ、かくまで広く行なわれたことは甚だ興味深い。おそらくこの現象は、当時の詩文が、単に個人的な文学活動の所産というよりは、宴など公的な儀式・集会と多分に結びついた存在であったことに由来すると考えられる。[22] 宴席や送別の場を美文で描写した王勃らの詩序がしきりに模倣せられたのもここに原因があろう。[23] また自らは詩作しないが、そこに参会する官人達にとっても、披露される詩文を理解することは教養の一つとされたに相違なく、ひいては文人達の種本となった初唐の詩文が学ばれることも充分に推測できる。[24] 王勃集が下級官人層とその周辺に広く受け容れられる素地は、このような形で用意されていたと思われる。

四

王勃集をはじめとする初唐詩文の摂取は、奈良時代の詩歌の表現に即して既に指摘されているところであるけれども、その流布の広さを示す明確な資料は存しなかった。ここにとりあげた王勃集の断簡は、零細な習書とはいえ、この欠を補うものであり、奈良時代における漢籍受容の一面を窺わせる点で重要な意義を有するといえよう。

註

(1) 小島憲之『国風暗黒時代の文学』一六～二〇頁、同「平安初頭の文学」(泊園一一、一九七二)、同「萬葉集から古今集へ」(『ゼミナール古典文学の心』所収、一九七三)、阪倉篤義「木簡の語る世界」(言語生活一九七一年十二月号)。

(2) 拙稿「平城宮出土木簡所見の文選李善注」(萬葉七六号、一九七一)。

(3) 唐書経籍志・新唐書芸文志の別集類に、「王勃集三十巻」とみえる。唐書巻一九〇上・文苑伝、新唐書巻二〇一、文芸伝などに本伝がある。

(4) 『唐鈔本王勃集』(書跡名品叢刊一四六)。内藤湖南「上野氏蔵唐鈔王勃集残巻跋」によれば、その書写年代は則天武后の垂拱・永昌年間(六八五―六八九)という。

(5) 『王勃詩序巻』(複製本)。内藤湖南「正倉院蔵二旧鈔本に就きて」(『研幾小録』及び全集第七巻所収)参照。なおこの

鈔本は、天地日月星載人などの文字に則天武后の制定した新字を用いたところがあるが、このうち人月の字体は、内藤乾吉「敦煌発見唐職制戸婚廐庫律断簡」（『中国法制史考証』所収）によると、聖暦以後（六九八～）に始用されたとみられる。奥書の慶雲四年（七〇七）と聖暦元年（六九八）とは、僅々十年程度の隔りしかなく、この鈔本の底本が、大宝度の遣唐使（七〇二年出発、七〇四年帰還）によって将来されたことは、ほぼ確実であろう。

(6) 小島憲之『上代日本文学と中国文学』（中）第五篇第五章、同（下）第六篇第一章、『国風暗黒時代の文学』（上）四七六～四七八頁。

(7) 「第十三次平城宮発掘調査出土の木簡」（奈良国立文化財研究所年報一九六四）、奈良国立文化財研究所史料V『平城宮木簡』㈠図版八五、同解説所収。いま後者において確定された釈読を掲げる。〔　〕付で示された文字は、完存しないためかかる表記になっているが、図版によっても明らかなように、〔　〕内の通り断定して差支えない。

(8) 明、張燮輯『王子安集』（四部叢刊集部所収）及び清、蔣清翊『王子安集註』。

(9) 注5所掲の複製本により、あわせて羅振玉『王子安集佚文』（永豊郷人雑著続編及び全集初編第三冊所収）の読みを参照した。

(10) 前掲釈文のうち、「也」は左辺を欠くから、「他」と改めるべきである。なお「滑」は「骨」に通じる。

(11) 因みにこれら三片は、文字も同筆と鑑せられている。『平城宮木簡』㈠解説、一六八頁参照。

(12) 木文は小島憲之『懐風藻・文華秀麗集・本朝文粋』（日本古典文学大系）による。（　）内は、同書の通し番号。

(13) (3)の王勃の句の出典は、論語子罕篇の「博我以文、約我以礼」と考えられるが、懐風藻52の詩序は、直接論語によったのではなく、全文にわたる王勃詩序の顕著な影響からみて、王勃の句を潤飾した可能性が強い。

(14) 注11所掲書一一頁。

(15) 同右三四・三九頁。

(16) 注2に同じ。

(17) 『南京遺芳』第八図、正倉院事務所編『正倉院の書蹟』第六三図。

(18) 小島憲之博士は、「滲」は「醪」（にごりざけ）の誤りかとされている（『国風暗黒時代の文学』（上）一六五頁）。

(19) 『南京遺芳』附巻、内藤乾吉「正倉院古文書の書道史的研究」（『正倉院の書蹟』所収）。辛国人の詳しい経歴について

は、『日本古代人名辞典』参照。

(20) 小島憲之『上代日本文学と中国文学』(中)一一三五頁、同(下)一三三二頁。

(21) 小島憲之『上代日本文学と中国文学』(下)三一九～二〇頁。

(22) 懐風藻・経国集に残る作例をみても、応詔・侍宴などの詩が多数を占める。また続日本紀には、三月三日・七月七日の宴をはじめ、その他の機会にも文人に詩をたてまつらせたことがみえる。続紀神亀三年九月十五日(玉棗の詩賦)、神亀五年三月三日、天平六年七月七日、宝字二年十一月廿六日(大嘗)、宝字三年正月廿七日(蕃客送別)、宝亀元年三月三日、宝亀十年三月三日の各条参照。

(23) 小島憲之博士は、長屋王を囲む宴の詩群に、王勃らの詩文の影響が著しい理由の一つとして、王勃の詩序に宴会などを扱った作が多いことをあげておられるが(『上代日本文学と中国文学』(下)一三〇八頁)、同様な関係は、当時の詩文一般についても成り立つと思われる。

(24) 王勃とならぶ初唐詩人駱賓王の文集が、奈良時代前半に舶載されていたことは、周知の通り、天平年中の読誦考試歴名(『大日本古文書』(編年)㉕五五四頁)に「駱賓王集一巻」とみえることから確実であるが、史料の性格からいって、本集もある程度下級官人の間に普及していたとみられる。即ちこの歴名には、各人(すべて女性か)の読誦できる典籍(大部分内典)が列挙され、評定結果とみられる「中」「上」といった文字が追記されている。しかしこれらの人々には、特別な高位者や著名人は見出せない。現存する優婆塞貢進解などから察するに、この歴名は、優婆夷又は出家人の考試に関係する文書とみられる。歴名の人物が優婆夷などの候補者とすれば、優婆塞として貢進された人々から類推して、官人や地方豪族の一族である可能性が大である。優婆塞貢進解にも、読誦する典籍に文選をあげている例があるが(『寧楽遺文』五一一頁)、駱賓王集を誦した丹比真人気都という人物も、下級官人の一族と考えてよかろう。

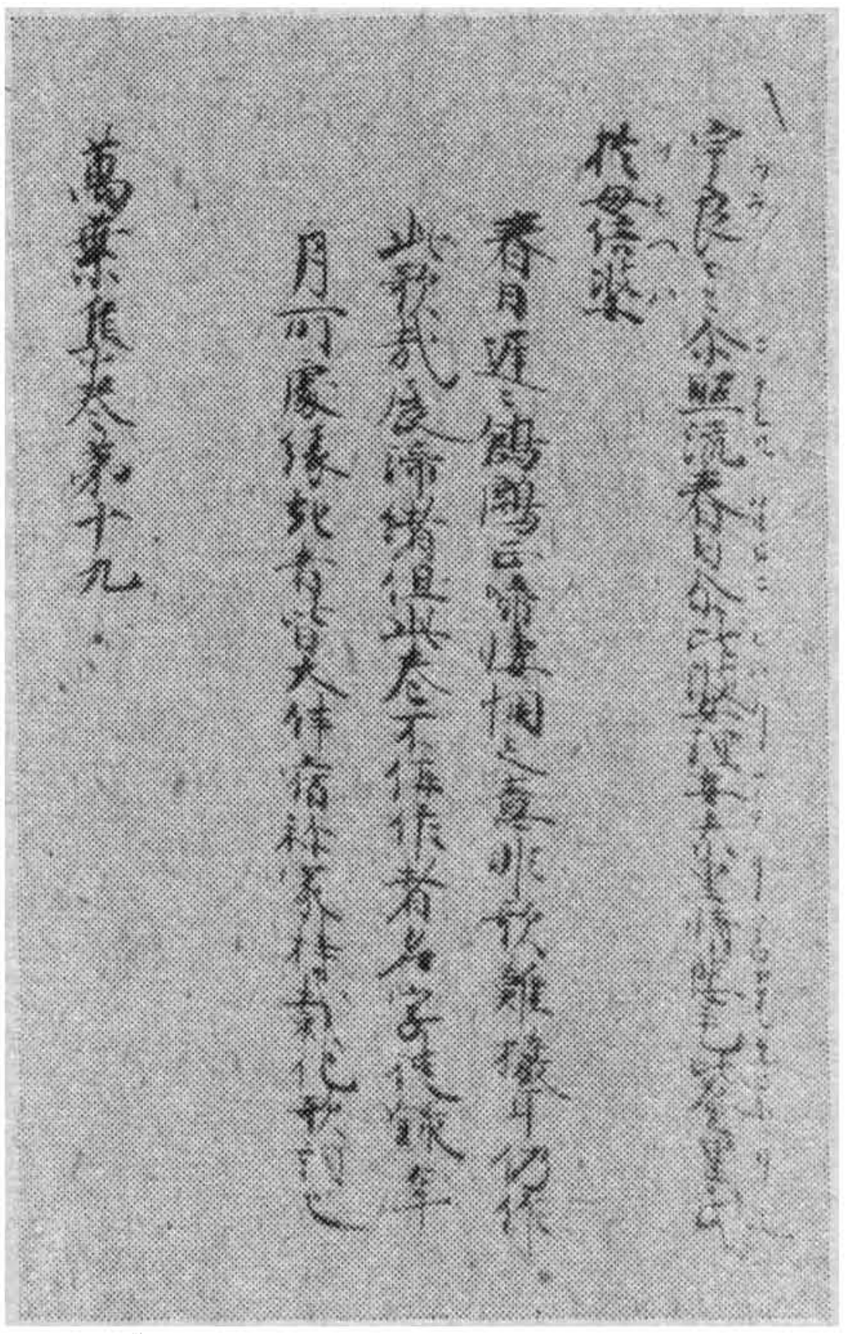
(昭和四十九年十二月二十二日稿
同五十年二月二日補訂)

(付記) 本稿を発表するについて、小島憲之先生より種々有益な御助言を賜わった。厚く御礼申し上げたい。

中臣祐春筆萬葉集斷簡について

濱口博章

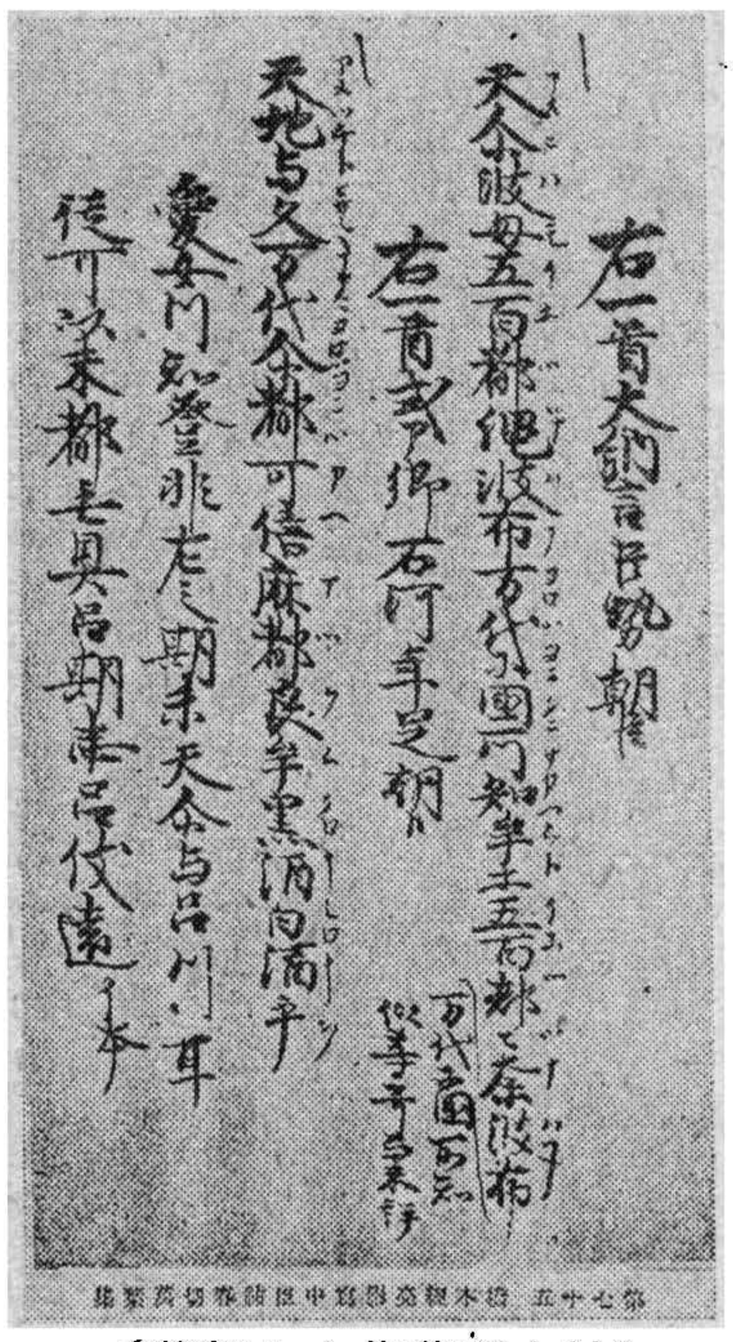
浄土真宗本願寺派に属する名刹、浄照坊（大阪市天王寺区真田山町四）所蔵の文書類を調査してゐるうちに、いはゆる春日本系統に属する萬葉集の断簡一葉を発見した。



料紙は斐紙系統で、二七・六cm×一七・二cm。ただし四周に茶色の絹綾地で縁取りをしてゐるため、正確な寸法はわからない。紙背に「春日社家祐春宇良〻〻ニ（印）」の極札を貼付。朱の陽刻印は古筆家のものではなく不明。

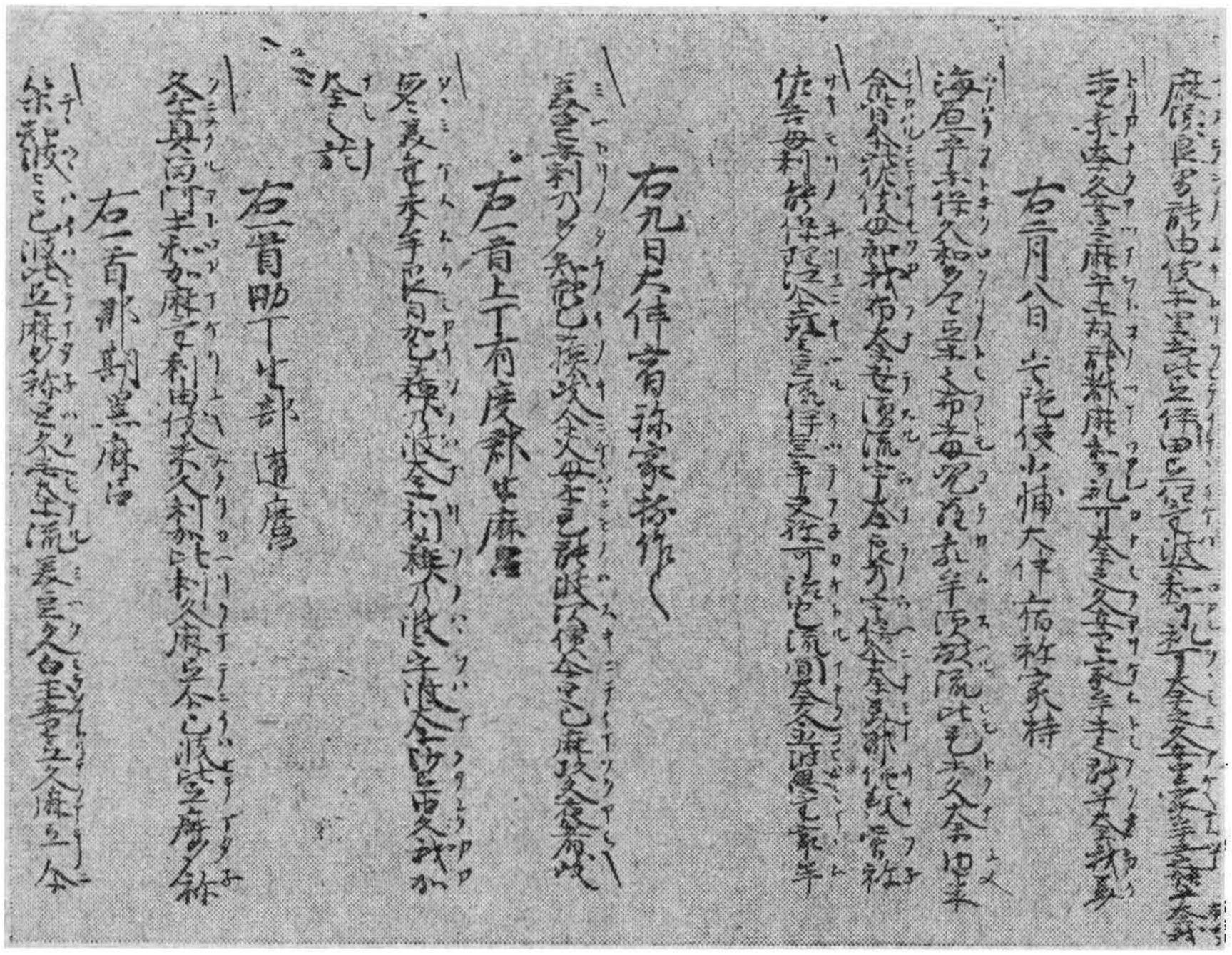
本文用字は通行本と異なるところもあるが、元暦校本や類聚古集とは一致する。ただし左注第二行三字目「哉」は「式」、五字目「滯」は「締」の誤り、九字目下は「中」の字脱落であらう。

この断簡は中臣祐定筆のいはゆる春日本萬葉集と体裁は同じであるが筆蹟は異なるやうで、『校本萬葉集　巻十』所載の「橋本経亮影写中臣祐春切萬葉集」が原本に忠実に影写してゐるとするならば、その筆癖と同じと見てよさうである。



（載転りよ集葉萬本校）

『校本萬葉集　首巻』に「橋本経亮影写萬葉集古筆は稲葉市郎右衛門氏の所蔵で、現に京都帝国大学の保管するところとなつてゐる。橋本経亮がその目撃した萬葉集の古筆類を影写したものであるが、中には他の模写から複写したものもあるらしい。…今日その原本の断簡も所在の知られてゐないものが数種ある。…春日社司祐春筆と伝ふるもの…等はその重なるものである。…春日社司祐春筆と伝ふるものは巻十九、二十にわたつて数葉を存してゐる。訓は漢字の右傍に片仮名でつけてある。寸法なり何なり前掲の春日懐紙裏切（私注『校本萬葉集増補』において春日本萬葉集と改称）と同本であつたらうと思はれる」と解説する。すなはち春日社司祐春筆と伝へる萬葉集切は「今日その原本の断簡も所在の知られてゐないもの」の「重なるもので」、「巻第十九、二十にわたつて数葉を存してゐる」といふのである。そこでこの橋本経亮影写本について、京都大学附属図書館に調査をお願ひしたが、現在は保管されてをらず、念のため明治年間からの寄托書台帳を閲覧したがそれにも記録されてゐないやうである。また、京都大学文学部国語学国文学研究室編『経亮本節用集』の開題（浜田敦氏）に、稲葉市郎右衛門氏蔵の経亮本節用集が「昭和八年八月十二日、納入者木村虎衛、価格は、百五十三円」で京都大学附属図書館に納入されたとあり、この影写本もあるいは購入されてゐないかと、昭和八年前後の納入本も調査していただいたが手懸りは得られなかつた。従つて祐春筆萬葉集切を影写した「巻第十九、二十にわた」る数葉とは、どのやうな箇所であるか不明であるが、掲出の一葉は巻十九であり、また巻二十の一葉は書



（ちうの「種九切歌古」蔵部陵書）

陵部蔵の「古歌切九種（九通）」（谷三六九）の中に含まれてゐる。

料紙は斐紙系統で、二八・〇cm×二四・八cm。左端から二・二cmの所に縦の折目があり、元来は袋綴であつたらしいが綴孔のあとはなく、手鑑のはづれと思はれる。紙背に「春日社家祐春（印）」の極札を貼付。朱の陰刻印は古筆家のものではなく不明。

歌は国歌大観番号四三三より四三四〇に至る九首。本文用字は元暦校本とほぼ一致し、とりわけ四三三の下句において著しい。

さて、この祐春の極札をもつ二葉の断簡を比較すると、はたして同一筆蹟と推定し得るか否か。巻二十の断簡は祐定書写の春日本や建長二年奥書の古葉略類聚鈔と共通する筆癖があり、巻十九の断簡とは一見したところ別筆と見做した方がよささうである。然し巻軸歌と巻中の歌とでは書写の態度に多少の差があるかもしれず、巻二十断簡の右半分は巻十九のそれとかなり類似した点もありさうに思はれる。また体裁の面で比較すると、巻十九はやや不自然な縦長であり、手鑑のために巻末の余白を裁ち落したかとも思はれ、もしさうであるならば、巻十九も巻二十と同様一面九行書（左注のあとの空白を一行分として）であつたと推定される。従つてこの二葉の断簡は、同一筆蹟と断定するには多少のためらひがありはするものの、異筆として斥ける積極的な根拠にも欠けるやうに思はれる。

佐佐木信綱氏は複製『春日本萬葉集残簡』の解説において、橋本経亮影写の祐春切萬葉集は、春日本と「各行の高さ、一行の幅員等全く一致し、体裁書風字体等も亦正に類似してゐるので、多分同一のものならむ」と推定し、「祐春筆とあるのは誤りで、祐春としては年代が符合せぬ」と述べ、祐定書写と考へてをられる。これに対し永島福太郎氏は『春日社家日記』（昭二十二　高桐書院）において、校本萬葉集所載の経亮影写中臣祐春切について「祐春と考へて殆んどよささうで、これにより祐春にも萬葉集書写のことがあつたことが分る」と述べ、祐春筆と推定された。いづれも決め手を欠く憾みはあるものの、橋本経亮影写本および断簡の極札の記載のまま、しばらく祐春筆としておきたい。

中臣祐定の孫、祐春については永島福太郎氏校訂の『春日社記録日記三』（中臣祐春記）の解説にくはしい。これによると「祐春は祐賢の嫡子。弘安五年九月三十日、若宮神主に補せられ、正和二年（一三一三）七月、その嗣子祐臣にその職を譲るまで在職三十二年、従四位上に進んだ。元亨四年（一三二四）九月五日に卒去。享年八十。歌道に優れ、また能書家として知られた」といふ。新後撰集以下の六集に十四首を撰ばれた勅撰歌人で、続現葉集・藤葉集等の私撰集にもその詠を遺してゐる。

数少ない鎌倉期の萬葉集断簡を、校勘の資料にもならうかと紹介する次第である。

なほ、昭和三十八年十二月の文車の会の展観図録（弘文荘発行）に春日本萬葉集が収められてゐることを申し添へておく。

また、宮内庁書陵部蔵「古歌切九種」のうち、第一葉目の萬葉集切の図版掲載は昭和五十年一月二十八日付で許可せられてゐる。

豫告

○第二十七回萬葉学会全国大会

七月五日（土）

公開講演会　大阪府中小企業文化会館（大阪府職業訓練センター内）（大阪市天王寺区上汐町五丁目二五番地。TEL（〇六）七七一―四〇九六番。地下鉄谷町九丁目下車、南東三百メートル。案内略図参照）

午後一時―四時

宴げと笑い　大阪市立大学教授　直木孝次郎氏

―額田王登場の背景―

恋詩・恋歌　大阪市立大学教授　小島　憲之氏

懇親会　なにわ会館（大阪市天王寺区石ケ辻町三八―一。TEL（〇六）七七二―一四四一番。講演会場より徒歩十分）

午後五時半より。会費四千円（予約制）。

七月六日（日）

研究発表会　帝塚山学院大学（大阪府南河内郡狭山町。TEL（〇七二三）六五―〇八六五番。南海電車高野線金剛駅下車、帝塚山学院バスのりばより学院バス十分）

午前の部　午前十時より

巻十五・三七六三番の歌について　坂本　信幸

萬葉集巻六巻頭部の従駕作品　知多市立つつじヶ丘小学校　杉浦　茂光
—場の復活—

「飛鳥という文字」　山辺高校　西崎　亨
—「アスカ」の枕詞としての「トブトリ」—

萬葉集ムロノキ考の反論によせて　堀　勝

午後の部　午後一時半より

放逸せし鷹の歌　京大大学院　上田　設夫

家持と防人歌　関西大学　神堀　忍

萬葉集巻五と家持　中京大学　佐藤　隆
—梅花関係歌を中心として—

七夕の歌　筑波大学　伊藤　博

七月七日（月）

萬葉旅行　宮址めぐり（雨天決行、予約制、日交観光バス使用）

集合場所　NHK（大阪中央放送局）前（地下鉄谷町四丁目下車、東へ三百メートル、馬場町交叉点）

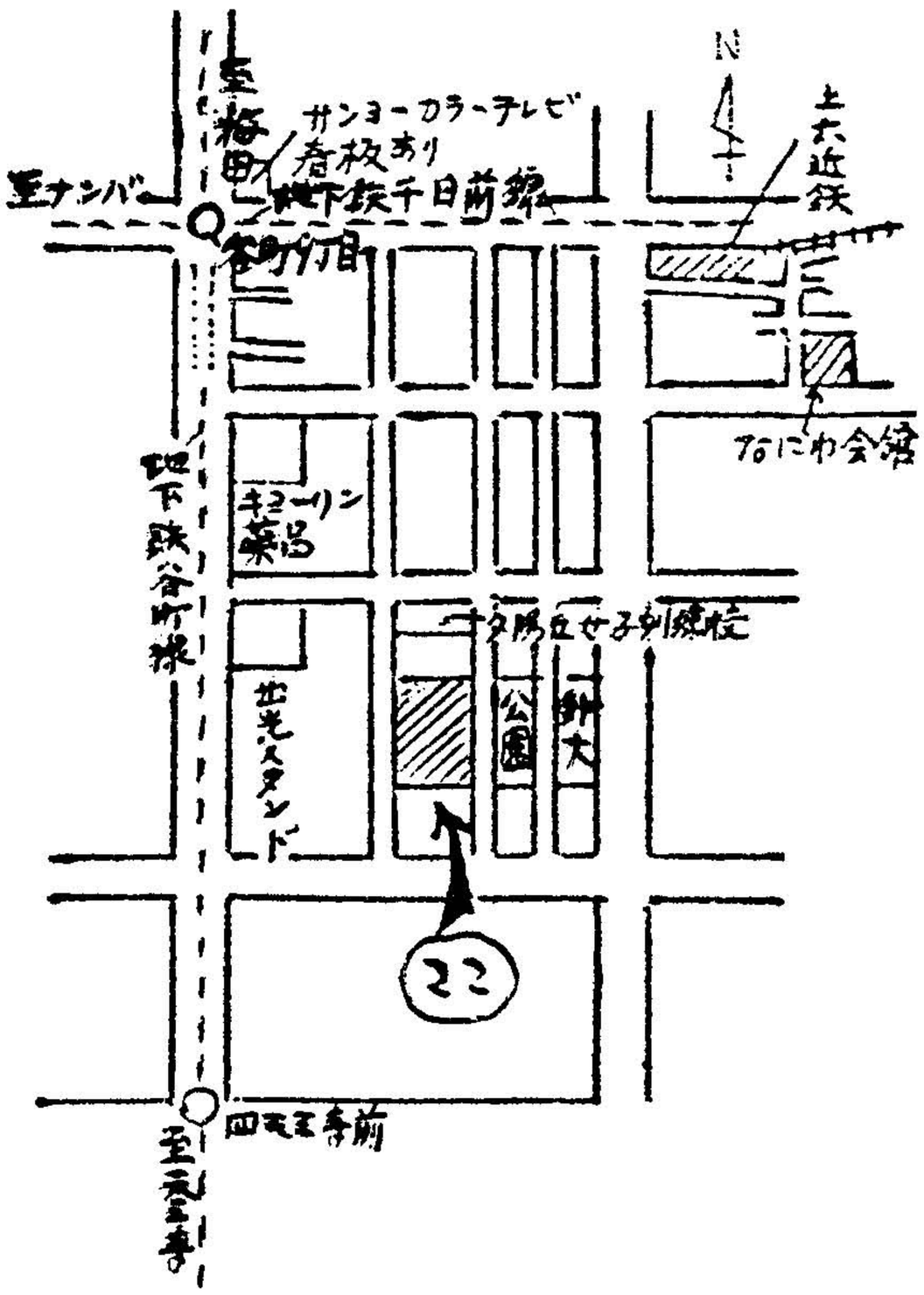
集合時刻　午前九時（時間厳守）

携行品　弁当、水筒（旅行中、購入の便が得難いので、携行されない方は昼食抜きとなります）

費　用　五千百円（バス代、夕・朝食・宿泊費）

旅　程　NHK…難波宮址（見学、午時十時十五分、近畿電通局前バス発車予定）——平城宮址（見学、車中で昼食）——藤原宮址（見学）——高鴨神社（見学。時間があれば、柿本神社・人麻呂墓、鴨都波神社、一言主神社へまわる）——葛城山ケーブルのりば〜〜葛城山上……葛城高原ロッジ（夕食、一泊。翌朝解散。明日香の諸宮址をめぐる便宜あり。また晴天ならば山上より眺望佳絶、葛城山系縦走も可能）

萬葉学会講演会場「中小企業文化会館」（大阪府職業訓練センター）案内略図



萬葉學會會員名簿

萬葉學會會員名簿

氏名	郵	住所
ア		
愛知教育大学付属図書館	448	刈谷市井ケ谷町広沢一
愛知県立大学国文学研究室	467	名古屋市瑞穂区高田町三丁目
青木生子	150	東京都渋谷区代々木富ケ谷一丁目三〇—三
青木紀元	916	鯖江市鳥羽町一四六—二六　鳥羽宿舎一号
青山学院女子短期大学図書館	150	東京都渋谷区渋谷四丁目四—二五
秋間俊夫	180-04	東京都清瀬市中里三—一〇四六 Department of Asian Languages & Literatures University of Auckland New Zealand
秋本吉徳	630	奈良市北川端町一
吾郷寅之進	583	大阪府羽曳野市古市一丁目四—五
浅井勇	398	長野県大町市大町区神栄町三七—七
浅井正弘	661	兵庫県尼崎市東難波四丁目二—四
浅田洋子	228	相模原市上鶴間三七三—三
浅野晃	502	岐阜市長良福土山三五三—一九
浅見徹	170	東京都豊島区東池袋三—七—一四　寄池マンション二〇二号
阿蘇瑞枝	814	福岡市西区城西団地一三—三四
麻生朝道	352	埼玉県北足立郡新座町大和田三六六二
跡見学園女子大学国文学科研究室	352	埼玉県北足立郡新座町大和田三六六二
跡見学園女子大学図書館	154	東京都世田谷区世田谷一—二五—一
天野令子	192-02	東京都多摩市落合三〇九—一〇
新垣幸得	654	神戸市須磨区潮見台町五丁目一三—一九
荒木敏	154	東京都世田谷区玉川美津町一—二三
アララギ発行所	411	三島市大社町二—二七
有田耕三		
イ		
伊井敏	426	藤枝市新南新屋一六—六
飯田瑞穂	343	越谷市北越谷二—一八—三
飯塚誠	374	館林市本町四丁目一三—一三
筏勲	564	吹田市千里山西二丁目九—三
五十嵐三郎	062	札幌市月寒西三条五丁目

池上禎造　606　京都市左京区一乗寺松原町九三
池田弥三郎　158　東京都世田谷区玉川一丁目六―一〇
石井和子　164　東京都中野区上高田二丁目六―一一
石井庄司　112　東京都文京区目白台三丁目九―二〇
石井秀夫　153　東京都目黒区碑文谷五丁目六―七
石川格　320　宇都宮市花園町一―六
石川博久　551　大阪市大正区三軒家浜通三―二四
石田紀子　534　大阪市都島区中野町三―八―三
石田肇　527-01　滋賀県愛知郡湖東町北菩提寺六七八
石田雄治　491　一宮市丹陽町三ツ井九〇〇―一
石原英司　461　名古屋市東区鍋屋上野町字半の木大幸住宅C四一
石原清志　610-01　城陽市久世小字下大谷六―八
磯貝市右衛門　166　東京都杉並区成田西二丁目一〇―一一
伊丹昇　299-43　千葉県長生郡一宮町一宮一〇三八―三　名越方
伊丹末雄　943　新潟県上越市寺町二丁目四―二六
市村宏　184　東京都小金井市桜町一丁目八―三
井手至　590-01　堺市高倉台三―一二―二四
糸井久　182　調布市下石原五三六　羽入方
糸井通浩　611　京都府宇治市広野町宮谷二〇―一〇
伊藤和子　150　東京都渋谷区恵比寿四丁目九―二〇
伊藤博　191　東京都日野市程久保五六三―二六三
伊藤博明　270-11　我孫子市湖北台三丁目一〇―二
稲岡耕二　180　東京都武蔵野市吉祥寺北町三―一―一七
稲益保寿　431-22　静岡県引佐郡引佐町金指一三三
稲村栄一　690　松江市上乃木町三三五―一五
犬養孝　663　西宮市今津山中町八―三三
井口貴史　330　埼玉県大宮市日進二―一五九
井上和子　540　大阪市東区東雲町二―三三
井上寿一　810　福岡市中央区平丘町六八
井上誠之助　673　明石市太寺一丁目三―一一
井上親雄　739-01　東広島市八本松町飯田清水川三四三―三
井上富蔵　702　岡山市築港新町五―三九
井上治夫　603　京都市北区紫竹東高縄町九
井上温子　661　尼崎市塚口町四丁目五〇―一七
井上博嗣　604　京都市中京区三条通神泉苑西入
井野口孝　533　大阪市東淀川区相川北通一―五
伊吹和子　108　東京都港区三田五丁目二―一八―八〇七
今井昌子　603　京都市北区大将軍西鷹司町五二
今井優　630-02　生駒市菜畑町一四五七―七
今泉進　156　東京都世田谷区上北沢一―三二―八―五

今木芳和　543　大阪市天王寺区上本町七丁目六一
今西実　632　天理市川原城町一五三
今福謙　600　京都市下京区松原通堀川西入　野村方
井村哲夫　569　高槻市安岡寺町二丁目三七―一六
岩井亮次　632　天理市田部町一
岩下武雄　313　茨城県常陸太田市三才町一九一
岩田武美　790　松山市和泉町九七七
岩手大学付属図書館　020　岩手県盛岡市上田三丁目一八―八
岩波千鶴枝　157　東京都世田谷区成城町二丁目三―一三
岩波芳二　176　東京都練馬区桜台三―一
岩野敬司　569　高槻市大塚町二―三―八
岩淵俊夫　320　宇都宮市今泉町三三―二
岩松空一　747-13　山口市上小鯖字中村九三―一

ウ

植垣節也　661　尼崎市東富松字上之フケ三五―一六
上島史朗　606　京都市左京区下鴨芝本町三七
上田設夫　602　京都市上京区御霊仲町四六　今野方
上田吉晴　612　京都市伏見区深草大亀谷八島町三　墨染アパート別館八号
上野理　346　埼玉県久喜市東五―三―一七
上野務　602　京都市上京区相国寺南門前町六三
上野展子　630　奈良市川久保町三〇
上野真砂子　808　北九州市若松区用勺町六―七―一〇二
上原浩一　770　徳島市中吉野町二―三八―四
上山春平　615　京都市右京区太秦垂水山町八
宇野邦晴　165　東京都中野区白鷺三―四―八
馬田義雄　599-01　泉南市幡代五二―一三
梅原猛　606　京都市左京区北白川西瀬ノ内町一七―二

エ

江口井子　182　調布市染地三―一―一一多摩川住宅(は)八―一四―五三
江頭勝子　813　福岡市東区御幸町公務員宿舎九―三三
衛藤兵衛　590　堺市奥本町一丁目八―三
江野沢淑子　154　東京都世田谷区若林一丁目一四―三
愛媛大学法文学部国語国文学研究室　790　愛媛県松山市文京町三
江間秀明　468　名古屋市昭和区天白町平針新屋敷　山内方
遠藤邦基　501-05　岐阜県揖斐郡大野町上秋九五〇―二五
遠藤宏　194-01　東京都町田市鶴川二丁目一五―九―二〇四
遠藤嘉基　606　京都市左京区下鴨上川原町四三

及川敬一　084　北海道釧路市大楽毛三八　釧路工業高専内
大井重二郎　607　京都市東山区山科四ノ宮川原町二
大川清司　063　札幌市西区手稲東二北五丁目三
扇畑忠雄　980　仙台市荒巻北杉山一—四一
大久保正　108　東京都港区高輪一丁目四—三　高輪住宅一〇七
大久保広行　336　浦和市三室字西宿一四九八
大倉山文化科学研究所　222　横浜市港北区太尾町大倉山
大越寛文　779-11　徳島県那賀郡羽ノ浦町宮倉
大阪樟蔭女子大学国文学研究室　577　東大阪市菱屋西二五八
大阪市立大学国文学研究室　558　大阪市住吉区杉本町四五九
大阪成蹊女子短期大学国文学研究室　533　大阪市東淀川区相川中通二丁目五
大阪大学教養部国文学研究室　560　大阪府豊中市待兼山町一
大阪大学文学部国文学研究室　560　大阪府豊中市待兼山町一
大阪府立工業高専国語研究室　572　大阪府寝屋川市幸町
大島文雄　930　富山市城北町六—一九
太田善麿　170　東京都豊島区巣鴨四—二一—二
大谷治　573　枚方市東香里二丁目一—三
大谷女子大学図書館　584　富田林市錦織志学台
大塚昌秀　444　愛知県岡崎市柱町字世戸荒子三—四
大坪併治　700　岡山市津島中一丁目二—三
大西福男　673-14　兵庫県加東郡社町社一四六—二
大野晋　188　東久留米市氷川台一丁目二四—五
大野保　176　東京都練馬区小竹町二—三
大野雍熙　060　札幌市南二十条西十三丁目
大橋千代子　174　東京都板橋区徳丸三—一九—一三
大浜厳比古　632　天理市勾田町一三
大森正雄　610-01　城陽市長池里開六三
岡崎芳三　601　京都市南区吉祥院里ノ内町三〇
岡田清子　182　東京都調布市深大寺一〇〇一
岡田真　659　兵庫県芦屋市若宮町三—一六
岡谷民男　780　高知市神田五九—九
岡林京子　557　大阪市西成区海道町一五
岡部政裕　420　静岡市安東三丁目二〇—一三
岡本勲　603　京都市北区小山下総町四七—二
岡本準水　166　東京都杉並区成田西四丁目一〇—六
岡本史子　700　岡山市円山一〇五四—三
岡山就実短期大学図書館　703　岡山市西川原二八八
岡山大学国文学研究室　700　岡山市津島

奥野健治　630-02　生駒市西旭ケ丘九―一三
小倉康雄　243　厚木市厚木七七五
尾崎富義　145　東京都大田区田園調布本町三三―七　潮アパート一号
尾崎暢殃　161　東京都新宿区下落合四―一―三
押部佳周　663　西宮市甲子園六―一〇―三
押見虎三二　940　新潟県長岡市土合四丁目四―一六
小田時子　730　広島市上幟町五―二六
小田寿雄　545　大阪市阿倍野区阿倍野筋一丁目六―一八
小野寛　171　東京都豊島区目白一丁目二番二―四〇四
小野寺静子　069-01　北海道江別市大麻西町二―八
澤瀉蔦子　603　京都市北区等持院南町三八
折戸耐次　470-35　愛知県知多郡南知多町篠島字神戸四一

カ

貝谷洋子　589　大阪府南河内郡狭山町西山台四丁目一―五―一〇三
学習院大学国語国文学研究室　171　東京都豊島区目白一―五―一
賀古明　158　東京都世田谷区奥沢一丁目三五―五
笠井紀子　213　川崎市高津区下作延三〇八四
梶原展子　813　福岡市東区香椎鎧坂五一九―一
春日和男　810　福岡市中央区谷一丁目一―一八
粕谷興紀　516　伊勢市岩渕一―五―二三
片山武　467　名古屋市瑞穂区高田町六丁目一四
勝村昭俊　509-03　岐阜県加茂郡川辺町西栃井四〇〇
桂孝二　760　高松市仏生山町乙六九―五三
葛山潔　799-15　今治市桜井旭町　月原治郎方
嘉手苅千鶴子　151　東京都渋谷区上原三―一三―一六　和敬寮
加藤静雄　466　名古屋市昭和区車田町一―四四
加藤雅敏　477　東海市横須賀町四の割一〇
加藤礼子　457　名古屋市南区道徳通三―六七
角川書店辞書教科書部　102　東京都千代田区富士見二丁目一三―三
門前真一　631　奈良市菅原町四〇二―一一
門前正彦　636　奈良県北葛城郡王寺町本町四―二九―九
金井清一　330　埼玉県大宮市吉野町二―一五四
金井寅之助　670　姫路市野里慶雲寺前町七〇七
金沢大学教養部図書室　920　石川県金沢市丸ノ内一―一
金沢大学法文学部図書室　920　石川県金沢市丸ノ内一―一
金森健一　576　交野市私市一―三―一
鎌田秀粋　654　神戸市須磨区大池町五丁目二―七
亀井孝　164　東京都中野区東中野一丁目二七―三
川上徳明　042　函館市戸倉町三六　函館工業高専内
川上富吉　359　埼玉県所沢市北野一三〇六

川口常孝　188　保谷市本町一丁目四―二〇
河野頼人　803　北九州市小倉区板櫃町二〇番二―五〇二
川端善明　606　京都市左京区一乗寺小谷町七
川辺広美　514　津市河辺町三四
川村幸次郎　135　東京都江東区森下四―二―八
関西大学図書館　564　吹田市山手町三丁目三―三五
関西大学文学部国文学研究室　564　大阪府吹田市千里山東三丁目一〇―一
菅野宏　960　福島市入江町四―二五
菅野雅雄　196　東京都昭島市玉川町二―四―一六
神堀忍　565　大阪府吹田市千里山西四丁目一八―三

キ

菊川丞　655　神戸市垂水区西舞子四―二七―一八ハウス大蔵山七〇七
菊沢季生　501-25　岐阜市太郎丸四七九―一
菊谷利宏　634　橿原市五条野町一五三〇―八一
菊池威雄　247　鎌倉市関谷元一
菊池毅　273　千葉県船橋市若松二―八―三―四〇六
岸正一　577　東大阪市菱屋西一―一五
岸俊男　630　奈良市押上町六〇
岸上慎二　251　藤沢市辻堂元町四―一五―二六
岸本俊彦　689-25　鳥取県東伯郡赤碕町出上三一
岸本翠　593　堺市上野芝向ヶ丘町四丁目一三八九
木田章義　606　京都市左京区久保田町二九　蜂谷方
北九州大学図書館　802　北九州市小倉区北方
北嶋徹　663　西宮市段上町一丁目二―三
北谷幸冊　630　奈良市東九条町一四三四北和団地一一号館四〇五号
北原淑郎　599-44　長野県伊那市東春近三五四七
北村英子　578　東大阪市瓜生堂一丁目五―八　泉荘内
北村行進　461　名古屋市東区小川町三
北山繁良　675　加古川市野口町古大内六一三
北山正迪　606　京都市左京区吉田中大路町三四
木下玉枝　351　和光市白子二丁目一―三三
木下正俊　617　向日市鶏冠井山畑二―一九
木之下正雄　890　鹿児島市薬師町三三
岐阜大学教育学部国語国文学研究室　502　岐阜市長良城之内
木船正雄　500　岐阜市長良宮路町一―二
木村里美　235　横浜市磯子区栗木町六九
九州大学国語国文学研究室　812　福岡市東区箱崎
京都教育大学文学会　612　京都市伏見区深草藤森町
京都女子大学国文学研究室　605　京都市東山区今熊野
京都女子大学図書館　605　京都市東山区今熊野

京都大学国語学国文学研究室　606　京都市左京区吉田本町
京都府立総合資料館図書部　606　京都市左京区下鴨半木町
共立女子学園図書館　101　東京都千代田区一ッ橋二丁目二―一
清原和義　573　枚方市楠葉三―五

ク

楠井雅子　617　向日市鶏冠井御屋敷三―一七
工藤進　065　札幌市北十九条東一九―七―七
工藤力男　734　広島市宇品東一丁目広島女子大学内
宮内庁書陵部　100　東京都千代田区皇居内
国枝利久　602　京都市上京区六軒町通今出川上ル西側　親縁寺内
国本治雄　189　東京都東村山市富士見町一―一四東台六―一〇四
久保昭雄　861-21　熊本市秋津町秋田二五―一八
熊谷不二子　602　京都市上京区黒門通中立売下ル
熊本女子大学国文学研究室　862　熊本市大江二丁目七―一
熊本大学付属図書館　860　熊本市黒髪二丁目四〇―一
久米常民　470-21　愛知県知多郡東浦町大字藤江字荒子一〇五
粂川光樹　236　横浜市金沢区釜利谷町二〇八四―一九
蔵中進　653　神戸市長田区鹿松町三丁目六―三五
倉野憲司　816　福岡県大野城市上大利二六六
蔵野嗣久　731-01　広島県安佐郡安古市町上安一〇二〇―三
蔵堀正雄　931　富山市田畑新町一―六―四
蔵本隆博　754-05　山口県美禰郡秋芳町秋吉
栗巣政次　635　奈良県北葛城郡広陵町斉音寺
栗田みつぎ　631　奈良市学園南一丁目三―三
黒岩駒男　830　久留米市御井町一六九―六
黒川総三　933-01　富山県高岡市伏木古国府五―三〇
黒川行信　653　神戸市長田区高東町二丁目六―一
黒沢幸三　631　奈良市疋田町五五―二
桑田明　761-01　高松市新田町甲八六―一
桑山靖子　673-02　神戸市垂水区神出町紫合五七
群馬大学付属図書館　371　群馬県前橋市荒牧町一三七五

ケ

芸林会　516　三重県伊勢市中村町桜ヶ丘二〇

コ

小泉かをる　194-02　東京都町田市相原二九六
小泉道　790　愛媛県松山市東長戸四―三―一　愛媛大学宿舎三三
小磯純子　259-13　秦野市堀西六〇―四

皇学館大学付属図書館　516　伊勢市倉田山
小路一光　165　東京都中野区若宮三丁目二七―六
高知女子大学付属図書館　780　高知市永国寺町五―一五
甲南女子大学付属図書館　658　神戸市東灘区森北町六丁目二―三
甲南大学文学部国文学研究室　658　神戸市東灘区本山町岡本
鴻巣隼雄　214　川崎市多摩区千代ケ丘四丁目二〇―一五
神戸大学文学部国文学研究室　657　神戸市灘区六甲台町
古賀精一　690　松江市西持田町祖母畑三五　公務員住宅二―二五
国学院大学図書館　150　東京都渋谷区東四丁目一〇―二八
国学院大学文学第一研究室　150　東京都渋谷区東四丁目
国文学研究資料館　142　東京都品川区豊町一丁目一六―一〇
国立図書館　110　東京都台東区上野公園
国立国会図書館収書部資料課　100　東京都千代田区永田町一丁目一〇―一
国立国語研究所　115　東京都北区西が丘三丁目九―一四
国立北京図書館　中華人民共和国北京(七)文津街一号
小島憲之　569　大阪府高槻市柳川町一丁目八―一三
小島正敏　655　神戸市垂水区上高丸三丁目一七―一四
小島吉雄　572　大阪府寝屋川局区内秦一九四
小清水卓二　630　奈良市二条町三丁目六―一九
小関清明　781-12　土佐市北地三八八
小谷博泰　654　神戸市須磨区磯馬川町六丁目一―二五
後藤昭雄　426　藤枝市藤岡二―三七―四　合同宿舎三三
後藤和彦　222　横浜市港北区大曽根町四六〇
後藤利雄　990　山形市緑町二丁目一〇―二
五島和代　813　福岡市東区香住ケ丘二丁目二三―三三
小西和一郎　336　浦和市下大久保六五
小林茂美　188　東京都田無市南町四―二五―六
小林久子　575　大阪府四条畷市中野一
小林吉一　328　栃木市片柳町五丁目二―一―九
小林芳規　738　広島県佐伯郡廿日市町佐方三八六―七九
小原幹雄　690　松江市北堀町一四九
小平郁子　604　京都市中京区壬生坊城町一〇
駒木敏　569　大阪府高槻市日吉台七番町一八―一九
小松晴彦　181　三鷹市下連雀八―五―二五
五味智英　161　東京都新宿区西落合一丁目二番二一号
米田進　634　奈良県橿原市今井町三丁目七―七
米田勝　635　奈良県大和高田市秋吉一〇四
近藤章　350　川越市岸町三丁目三―三　県教職員公舎五号
近藤信義　180　東京都武蔵野市御殿山二―一六―二
近藤博子　259-01　神奈川県中郡大磯町国府本郷一四〇九

サ

西郷信綱　211　川崎市中原区井田二九八
斉藤克己　981-12　宮城県名取市名取が丘一—一〇五
斎藤孝一　919-01　福井県南条郡今庄町今庄
斎藤定男　133　東京都江戸川区北小岩四—一九—一八
斉藤照夫　180-04　東京都清瀬市松山二丁目五—八
斎藤光昭　990　山形市飯塚町一四七—一〇
佐伯梅友　155　東京都世田谷区代田二丁目一四—三
坂井照弥　862　熊本市大江六—二八—一一　大谷ビル四三号
境田四郎　558　大阪市住吉区帝塚山西三—八二
阪倉篤義　606　京都市左京区吉田下大路町四五
阪下圭八　186　東京都国立市富士見台三—二—一〇四
佐賀大学付属図書館　840　佐賀市本庄町一
佐賀竜谷短期大学付属図書館　840　佐賀市水ケ江町
相模女子大学図書館　228　神奈川県相模原市上鶴間
坂本信幸　630　奈良市古市町一八四六—八　春日苑一—一八
坂元義種　567　大阪府茨木市中穂積二—一三—一三
桜井治男　516　伊勢市桜木町七—四
桜井満　192-02　東京都稲城市坂浜三三三
迫野虔徳　860　熊本市黒髪四丁目三—四〇
笹川泰伸　765　香川県善通寺市上吉田町二三
佐々木茂子　464　名古屋市千種区新池町四丁目二七
佐園泰男　675　加古川市粟津県営住宅一六号
佐田智明　803　北九州市小倉区徳力公団住宅五三—三〇四
貞光威　501-31　岐阜市芥見諏訪山団地八〇—三七七
佐藤嘉一　874　大分県別府市朝見一丁目二—一一
佐藤一芳　662　西宮市苦楽園四番町三—四
佐藤喜代治　980　宮城県仙台市木町通一丁目八—六
佐藤正一　940　新潟県長岡市宮原三丁目四—一六
佐藤真策　995　村山市楯岡二三四—三
佐藤隆　452　名古屋市西区大野木一—三六
佐藤武義　980　仙台市荒巻字青葉宮城教育大学青葉宿舎二—二
佐藤忠彦　069-01　北海道江別市大麻沢町二四—九
佐藤亨　021　岩手県一の関市宮沢五—三
佐藤寿子　080　帯広市外木野西五丁目
佐藤美知子　606　京都市左京区銀閣寺前町一〇シャトー銀閣二〇三号
佐藤光子　733　広島市西観音町七—八
佐藤保子　249　逗子市小坪二丁目六—三四
佐藤勇吉　632　天理市櫟本町一五二　櫟本西部市営住宅一四—三

鮫島正英　891-01　鹿児島市上福元町一三〇四
三光迪　738　広島県佐伯郡五日市町藤垂園九—一〇

シ

椎名嘉郎　327　栃木県佐野市浅沼町八—一
滋賀大学付属図書館教育学部分館　520　滋賀県大津市石山平津町一九七
四国女子大学図書館　771-11　徳島市応神町古川字戎子野
静岡女子大学付属図書館　420　静岡市谷田四〇九
実践女子大学図書館　150　東京都渋谷区東一丁目一—二
四天王寺女子大学図書館　583　大阪府羽曳野市埴生野一三〇八
篠原良夫　491　一宮市貴船二丁目五—三九
渋谷虎雄　662　西宮市五月ケ丘四—三六
嶋稔　020-01　盛岡市緑が丘四—一—七
島田勇雄　658　神戸市東灘区住吉町宮守堂住吉南住宅二〇四
島津忠夫　458　名古屋市緑区鳴海町螺貝五七—一三〇四
島根大学付属図書館　690　島根県松江市西川津町一〇六〇
清水克彦　617　長岡京市梅ケ丘一—四〇
清水弥一　501-06　岐阜県揖斐郡揖斐川町森前
志水礼子　464　名古屋市千種区新池町二—一〇
下田忠　794　新居浜市八雲町七—一
下村梅子　662　西宮市高塚町六—八
修猷館高校図書館　814　福岡市西区西新町
寿岳章子　617　向日市上植野浄徳一〇—一
東海林弘　259-01　神奈川県中郡二宮町百合ガ丘二—三〇—一三
白江恒夫　553　大阪市福島区下福島二丁目一
白藤礼幸　310　水戸市東原三丁目三—四一　茨城大学東原宿舎RC一—一〇六
神道史学会　605　京都市東山区祇園町八坂神社内
新藤知義　372　群馬県伊勢崎市上泉町二九四
新間一美　602　京都市上京区塔ノ段毘沙門町四六七　佐々田方

ス

菅田文夫　735　広島県安芸郡安芸町温品九三五
菅原重兼　151　東京都渋谷区代々木四—六〇—五
杉浦茂光　475　愛知県半田市太田町二—五七
杉田篤子　280　千葉市大宮台四—一三—一〇
杉山康彦　214　川崎市多摩区宿河原一三五四
鈴江幸太郎　617　長岡京市一里塚二—七—五〇四
鈴木一男　631　奈良市平松町五七—六
鈴木太吉　441-13　新城市有海字下稲場五〇
須田善四郎　960　福島市山居三七—一

砂入恒夫　188　東久留米市前沢二丁目一〇—九

セ

成城大学国文学研究室　157　東京都世田谷区成城六丁目一—二〇
成城大学図書館　157　東京都世田谷区成城六丁目一—二〇
聖心女子大学国文学研究室　150　東京都渋谷区広尾三丁目一八—一四
清泉女子大学萬葉集研究サークル　141　東京都品川区東五反田三丁目一六—二二　清泉女子大学国文学研究室内
星美学園短期大学国文科　115　東京都北区赤羽台四丁目二—一四
関守次男　811-41　福岡宗像郡宗像町自由ヶ丘二—九—四
瀬古確　276　千葉県八千代市大和田新田一五—一—九—二〇三
専修大学文学部国文学研究室　214　川崎市多摩区生田四七六四
千田幸夫　890　鹿児島市下荒田町三八〇

ソ

相愛学園図書館　541　大阪市東区本町四丁目二七
曽田文雄　690　松江市菅田町三一〇　菅田宿舎二号
外島永見子　580　松原市阿保三丁目一六
園田学園女子大学図書館　661　兵庫県尼崎市栗山字船子二六五

タ

高野正美　197　東京都福生市熊川七七
高橋和夫　180　武蔵野市吉祥寺本町四—二七—一七
高橋克美　062　札幌市平岸六条十丁目
高橋善治　516　伊勢市中村町九二三　多米方
高橋正孝　520　大津市中庄二丁目一六—三四
高橋六二　356　川越市大字今福四六一　田園ハイツ一号棟一〇九
高林誠一　591　堺市百舌鳥赤畑町五丁目六四七
高原武臣　920　金沢市笠舞三—一八—七
高原美忠　606　京都市左京区岡崎円勝寺町三九
高松政雄　501-11　岐阜市城田寺字大正六八四—九
滝本典子　514-11　三重県久居市東鷹跡町二〇五—五
田口庸一　171　東京都豊島区目白一丁目二—一—四〇一
武井睦雄　174　東京都板橋区清水町九二　清水町住宅八—二〇三
竹内和子　475　愛知県半田市成岩本町三—七四
竹内金治郎　166　東京都杉並区浜田山一丁目二—一五
竹内美智子　152　東京都目黒区自由が丘三—一六—三—四〇一
竹尾正子　811-41　福岡県宗像郡宗像町自由ヶ丘五丁目一四—一五
竹熊義孝　862　熊本市大江町五丁目二—一
竹島忠佐　573　枚方市渚元町三六—一〇
武智雅一　791-42　松山市高浜町二丁目一四七〇

竹中栄 546 大阪市東住吉区矢田住道町八七六
武部弥十武 933-01 高岡市伏木東一ノ宮六—一七
武山真理子 335 埼玉県蕨市北町三—一〇—一
田島光平 426 藤枝市高岡一丁目一—三七
多田実 299-52 千葉県勝浦市沢倉八二—一
辰馬悦蔵 662 兵庫県西宮市鞍掛町四—一六
巽康真 639-02 奈良県北葛城郡香芝町馬場三六六
田中卓 516 伊勢市宇治浦田町六四九
田中文雅 520 大津市中庄三—一五—五
田中美子 661 尼崎市上の島地元三六—二
棚橋和枝 272 千葉県市川市鬼越一丁目三—八
谷萩礼子 113 東京都文京区千駄木五—一九—一〇
谷山茂 606 京都市左京区下鴨西高木町二六
玉村文郎 604 京都市中京区三条通油小路東入ル塩屋町三四
檀野菊枝 601-13 京都市伏見区醍醐西大路町二—五—一六一

ツ

塚原鉄雄 525 滋賀県草津市草津一丁目二〇—三九
築島裕 155 東京都世田谷区代沢一丁目二〇—六
辻憲男 663 西宮市上鳴尾町二六—一五
辻本一郎 654 神戸市須磨区天神町四丁目四—三九
土田知雄 338 浦和市大久保領家三〇—三
土橋寛 606 京都市左京区松ケ崎呼返町一八
土屋文明 105 東京都港区青山南町五—二〇
都竹通年雄 352 埼玉県新座市栄二丁目四—一六
恒松侃 485 愛知県小牧市藤島字砂原二七—二五 藤島団地六五
津之地直一 440 豊橋市八町通五—一四一
露木悟義 258 神奈川県足柄上郡開成町円通寺九三
津留依子 603 京都市北区小山東花池町一 吉岡方
鶴久 818-01 福岡県筑紫郡太宰府町西五条二六七二—八
鶴見大学付属図書館 402 山梨県都留市上谷一六六六
横浜市鶴見区鶴見二丁目一—三 230

テ

帝京大学図書館 192-03 東京都八王子市大塚三五九
帝塚山学院大学図書館 589 大阪府南河内郡狭山町大字今熊一八三
帝塚山学院短期大学図書館 558 大阪市住吉区帝塚山中三丁目五二

寺川潔　630　奈良市多門町三
寺川真知夫　657　神戸市灘区城ノ下通一丁目六—七　斗内方
天理大学国文学研究室　632　奈良県天理市杣之内町一〇五〇
天理図書館　632　奈良県天理市杣之内町一〇五〇
天理大学図書課　632　奈良県天理市杣之内町一〇五〇

ト

土井清民　166　東京都杉並区堀之内一丁目六—二七
土井洋一　171　東京都豊島区目白一—五　学習院大学文学部国文学科研究室
東京教育大学国文学研究室　112　東京都文京区大塚三丁目二九—一
東京女子大学日本文学研究会　167　東京都杉並区善福寺二丁目
東京大学文学部国文学研究室　112　東京都文京区本富士町
東京都立中央図書館逐次刊行物課　106　東京都港区南麻布五丁目七—一三
同志社大学国文学研究室　602　京都市上京区今出川
同志社大学人文科学研究所資料部　602　京都市上京区新北小路町
同志社図書館　602　京都市上京区相国寺門前町六三—一
東北大学文学部国文学研究室　900　仙台市片平町
東野治之　630　奈良市尼ケ辻町四丁目甲四六—二
東洋大学国文学研究室　113　東京都文京区白山五丁目二八—二〇
東洋大学図書館　113　東京都文京区白山五丁目二八—二〇

土岐善麿　153　東京都目黒区下目黒四—八〇一
徳永久子　602　京都市上京区室町出水上ル
都倉義孝　181　東京都三鷹市大沢四丁目五—一八
戸田輝夫　074　北海道深川市一已町二四孝
富田恭一郎　560　大阪府豊中市南桜塚四丁目一四—一三
富田大同　675-13　兵庫県小野市鹿野町三〇七
冨森盛史　518-04　三重県名張市桔梗が丘一—二—二九
友松孝行　871　中津市中殿町三丁目
富山大学文理学部国文学研究室　930　富山市五福三九〇

ナ

直木孝次郎　630　奈良市尼ケ辻四丁目三
仲正子　581　八尾市太田一五四一
中井武雄　451　名古屋市西区堀詰町一丁目六
中川浩文　605　京都市東山区今熊野日吉町四七—五
中川美登里　673　明石市東人丸町一五—二五
中川幸広　243　海老名市さつき町一—一四—四〇三
中川芳雄　422　静岡市小鹿一丁目三—一八
中島和子　560　大阪府豊中市原田元町二—二五—五
中島信太郎　675-11　兵庫県加古郡稲美町北山八〇一

中島好昭　729-55　広島県比婆郡東城町小奴可
中田義明　800　北九州市門司区東馬寄三―二―一〇四
中塚公彦　545　大阪市阿倍野区阿倍野筋五丁目八―三三　いざわ荘
中西宇一　610-01　城陽市寺田垣内後七―二
中西進　157　東京都世田谷区祖師谷六丁目六―二〇
中西則夫　454　名古屋市中川区荒子町字大和ヶ池八二
中西正雄　467　名古屋市瑞穂区松栄町一―二四
中野真作　559　大阪市住之江区西住之江二丁目四―三三
中原勇夫　840　佐賀市柳町六―一五
中村隆彦　070　旭川市春光台二条二丁目旭川高専宿舎
中村忠行　639-11　大和郡山市北郡山四〇
中村久　251　藤沢市辻堂東海岸二―二―八
中村宗彦　631　奈良市中登美ガ丘一丁目A三―一〇三
中村行利　802　北九州市小倉区黒原本町一組
中村幸彦　560　大阪府豊中市本町八丁目四―一四
中山昭道　301　竜ヶ崎市長峯町九九四
永広禎夫　640　和歌山市薗部四二一　公団鳴滝団地A六―一〇三
名古屋大学文学部国文学研究室　464　名古屋市千種区不老町
夏目忠男　431-14　静岡県引佐郡三ヶ日町岡本六六八
納屋信　181　三鷹市中原一丁目一五―一六　ほおじろ荘内
奈良県立橿原図書館　634　橿原市畝傍町
奈良国立文化財研究所　630　奈良市春日野町五〇
奈良女子大学付属図書館　630　奈良市北魚屋西町
奈良大学図書館　631　奈良市宝来町三三〇
成田登　038-02　青森県南津軽郡大鰐町字羽黒館九四―七
鳴上善治　532　大阪市淀川区十三本町二丁目三―七
南波浩　606　京都市左京区吉田神楽岡町八
西尾実　166　東京都杉並区和泉町八一五
西岡将美　516　伊勢市倉田山皇学館大学内
西崎亨　632-02　奈良県山辺郡都祁村南之庄
西之谷好　798　愛媛県宇和島市大浦一区
西端幸雄　520　大津市長等三丁目三―六
西畑精子　578　東大阪市鴻池三六―二　㈱日阪鴻池寮内
西原啓子　606　京都市左京区上高野大塚町六―一三
西原能夫　160　東京都新宿区花園町五五　貝塚ビル六〇一号
西宮一民　516　伊勢市桜ヶ丘三〇―一四
二宮勝美　254　平塚市諏訪町三―七
日本大学文理学部図書館　159　東京都世田谷区桜上水三丁目二五―四〇

日本文学協会　170　東京都豊島区南大塚二丁目一七—一〇
日本女子大学図書館　112　東京都文京区目白台二丁目八—一

ノ

ノートルダム清心女子大学図書館　700　岡山市上伊福町二丁目一六—九
野上久人　722　広島県尾道市日比崎町一三—一〇
野口一郎　156　東京都世田谷区松原町三—二—五
野口嘉生　078-39　北海道苫前郡羽幌町天売
野田久子　410　静岡県沼津市真砂町二八七
野中春水　606　京都市左京区下鴨北園町一〇三—四
野村君代　591　堺市新金岡町一丁目七—二六—一〇六
野村重碩　177　東京都練馬区関町五—一九三
野村庄次郎　069-01　北海道江別市大麻団地宮町六番地B二—二

ハ

梅花女子大学図書館　567　茨木市豊川宿久庄一七一
迫徹朗　860　熊本市黒髪二丁目三九—一　熊本大学法文学部国文研究室
橋浦兵一　982　仙台市鹿野本町一〇—二
橋本四郎　573　枚方市香里ヶ丘八丁目一三—二
橋本四郎　600　京都市下京区七条御所ノ内南町七三
橋本達雄　351　朝霞市宮戸一〇三〇
橋本敏雄　674　明石市魚住町清水一五一—四　魚住コーポB二〇六
蓮沼徳次郎　611　宇治市神明宮東九九
長谷川信好　544　大阪市生野区桃谷二丁目一五—一〇
畑恵美子　538　大阪市鶴見区今津北五—八—二
畑耕栄　563-03　大阪府豊能郡能勢町長谷八四七
秦俊子　613　京都市伏見区淀木津町六〇九
蜂矢宣朗　632　天理市守目堂町二五　おやさと五号館一〇三
蜂矢真郷　663　西宮市高木東町六—一六　清月荘
服部喜美子　466　名古屋市昭和区御器所三丁目一五—三三
花上しのぶ　191　東京都日野市日野三三六一
花田瑞穂　036　青森県弘前市中野二丁目二—八
土部弘　536　大阪市城東区永田三—一—三—三〇一　深江橋コーポC—三〇一
土生田純之　537　大阪市東成区大今里一丁目五—四
浜口博章　659　兵庫県芦屋市親王塚町八—一九
浜田清次　780　高知市白石町三丁目七—五三
浜千代清　603　京都市北区衣笠西開町一八—一三
浜中多紀子　586　河内長野市千代田南町八—一七
林勉　330　大宮市浅間町一—六一　多田方
林田正男　814　福岡市西区別府団地一〇—一四

Halla Istvan Buda Pest Vpesti BU1/3 Univ. Eö Tvös-BTK.
Chair fot Chinese and Eastern Asiatic Philology Hungary

原田貞義 020 盛岡市夕顔瀬町一五—八
原田芳起 577 東大阪市小若江四—八—一九
Universite de Paris
Faculte des Lettres et Sciences Humaines
57 Rue de La Sorbonne, Paris (V)
春田助志 560 豊中市熊野町一丁目八—三 椿アパート
半沢正一 960 福島市宮町四—二六
半田萬葉研究会 475 愛知県半田市乙川太田町二—五七 杉浦方

ヒ

久松潜一 176 東京都練馬区小竹町一—五三
飛田順子 465 名古屋市千種区猪高町上社鋳物師洞四—八
肥田野昌之 343 埼玉県越谷市南越谷三—一五—二一
日吉盛幸 175 東京都板橋区西台三—八—三 清水方
平岡澄子 623 綾部市上野町ク二—二
平田芳江 540 大阪市東区大手前之町四 大手前宿舎三三
平館英子 187 東京都小平市学園東町五三—一九
平山城児 350 川越市南大塚三〇二〇—五六
広岡義隆 522 彦根市日夏町四五六
広島女子大学付属図書館 734 広島市宇品東一丁目一—七一
広島大学文学部国文研究室 530 広島市東千田町
広島文教女子大学付属図書館 731-02 広島県安佐郡可部町上原二三八
広瀬捨三 590 堺市一条通五—二五
広瀬誠 930 富山市星井町三丁目二—一三
広多建次 114 東京都北区滝野川六丁目三—一四
広田二郎 115 東京都北区赤羽台一丁目四—四三—五〇一
広浜文雄 518-01 三重県上野市上神戸七五一

フ

深沢三千男 584 富田林市錦ヶ丘町五—一七
福井治男 611 宇治市伊勢田町砂田六—二九一
福岡教育大学図書館 811-41 福岡県宗像郡宗像町赤間七九
福岡女子大学図書館 813 福岡市東区香住ヶ丘一丁目一—一
福島大学付属図書館教育学部分館 960 福島市浜田町三—二三
福島利顕 632 天理市柳本町山田三〇三
福島基喜 167 東京都杉並区清水三丁目二—三 比留間方
福永静哉 521-11 彦根市野良田町三五
藤井専蔵 662 西宮市上ヶ原五番町二—二
藤井毅 590 堺市一条通九—三三

藤田福夫　465　名古屋市千種区西里町四丁目五三
藤田昌弘　196　昭島市玉川町東中神団地三―六三
藤田勝　509-64　岐阜県瑞浪市釜戸町公文垣内二六二
藤谷佳樹　047　北海道小樽市緑二―二四―一五
藤原英吉　710　倉敷市石見町四―五四
藤原芳男　655　神戸市垂水区星ヶ丘三丁目一―一四
藤本知代子　580　松原市河合町二―六―五
藤森祐　399-82　長野県南安曇郡豊科町豊科五七八五
古屋彰　929-02　石川県能美郡川北村中島
「文学」編輯部　101　東京都千代田区神田一ッ橋二―三　岩波書店内

へ

G.Wenck　Hamburg Harksheide
Alter Kirchenweg 22. Germany

ホ

法政大学図書館資料室　102　東京都千代田区富士見二丁目四七―一
保坂達雄　155　東京都世田谷区代沢三―一八―四　久保田方
星和子　167　東京都杉並区西荻南一―一四―七
細江幸久　516　伊勢市楠部町一〇三―八　外村方
北海道大学文学部国文学研究室　060　札幌市北八条西五丁目
堀勝　644-01　和歌山県日高郡日高町志賀二三四七
堀道子　579　東大阪市本町四―二六
堀井隆川　192　八王子市元八王子町三丁目三三〇　真照寺
本位田重美　658　神戸市東灘区本山町岡本長子一三
本田義憲　610-01　城陽市平川車塚五五
本田義彦　862　熊本市大江五丁目三―三
本田義寿　612　京都市伏見区深草宝塔寺山町三一　自得院内

マ

前田淑　816　福岡市南区上日佐三五　福岡女子学院短期大学内
牧野美貴子　603　京都市北区北野西白梅町七一
巻山田鶴子　617　長岡京市今里宇津久志三―六
増田茂恭　573　枚方市田口五六七　府営住宅三―三〇五
松浦孝一　997-03　鶴岡市大字中橋字村西五〇
松尾聡　107　東京都港区北青山二丁目一〇―一八
松尾玲子　665　宝塚市仁川団地三番二―四〇一
松下一夫　591　堺市大豆塚町一丁目一三　大豆塚第三団地二〇号
松島英明　376　桐生市西堤町二七八
松田有弘　540　大阪市東区大手前之町　大手前高校内

松田芳昭 720 福山市東深津町王子下三三六
松田好夫 489 瀬戸市鹿乗町一三八
待鳥ミチヨ 573 枚方市宮之阪五—一五
松長俊雄 632 天理市遠田町三八
松原博一 177 東京都練馬区大泉学園九五七
松村弥栄子 232 横浜市鶴見区上末吉一—二四—一〇 日の出荘六
松本剛 353 埼玉県志木市本町五—一七—二七
真鍋次郎 799-14 愛媛県東予市宮之内四六—一
馬淵和夫 170 東京都豊島区南大塚一丁目二六—一三
丸岡節江 583 羽曳野市白鳥三—一〇—五
丸山顕徳 648 和歌山県橋本市神野々三八二
政所賢二 814 福岡市西区鳥飼六丁目二〇—八
三木康 670 姫路市東魚町二九
身崎寿 140 東京都品川区西大井四丁目一四—一
三嶋健男 632 天理市富堂町三〇〇—三八
水島義治 194 東京都町田市本町田三〇〇六
三谷栄一 156 東京都世田谷区桜一丁目三〇—九
三塚貴 992 米沢市通町七丁目四—一六 水明荘七号室

三辺清一郎 658 神戸市東灘区住吉町鴨子ヶ原御影住宅六—二〇一
三部敏子 143 東京都大田区大森北三丁目一五—五
美夫君志会 468 名古屋市昭和区八事本町一〇一 中京大学国文学研究室内
三間重敏 530 大阪市北区天神橋筋五—一三
宮岡薫 569 高槻市柱本新町一番B三棟二〇二号
宮城教育大学付属図書館 980 宮城県仙台市荒巻字青葉
宮崎逸子 475 半田市有楽町六—三七
宮崎健三 165 東京都中野区江原町三—一七—七
宮地伸一 121 東京都葛飾区東立石一—八—九
宮地由紀子 500 岐阜市東興町二—一
宮地裕 564 吹田市江坂町四—五四—二 コープ野村江坂台二〇六
宮村千素 614 京都府綴喜郡八幡町男山住宅二三—二〇二
宮本喜一郎 663 西宮市上鳴尾町五—二
宮脇光顕 675-13 兵庫県小野市新部町四三四
三輪知恵子 496 愛知県津島市鹿伏兎町西郷内一三七

武蔵大学人文学部日本文化研究室 176 東京都練馬区豊玉上一丁目二六
武藤正夫 181 三鷹市牟礼六丁目三 牟礼公団一六三四
村瀬憲夫 640 和歌山市新中通一丁目 大勢荘六号室
村田正博 604 京都市中京区蛸薬師通堀川西入ル金屋町

村田通男　922-04　石川県加賀市塩浜町
村山出　080　帯広市西三条南十六丁目　藤江方
室田浩然　579-65　下関市吉見局区内永田町一〇三七
室伏秀平　259-03　神奈川県足柄下郡湯河原町宮上二一七

メ

明治大学図書館　101　東京都千代田区神田駿河台一一

モ

毛利正守　545　大阪市阿倍野区松崎町二一九一一三　紀峯荘内
望月郁子　420　静岡市北安東三一一〇一一四
籾山文子　152　東京都目黒区洗足二丁目三一六
百瀬順子　577　東大阪市中小阪五三八
森淳司　183　東京都府中市浅間町二丁目六一九
森一郎　980　宮城県仙台市柏木三丁目九一一
森実　420　静岡市馬淵一丁目九一二七
森河百合子　112　東京都文京区大塚六丁目二八一一五
森重敏　631　奈良市学園南二丁目三一一〇
森田孝浩　582　柏原市旭ヶ丘三丁目一一二九　丸紅団地二三
森本善信　652　神戸市兵庫区鵯越町六六
森山隆　814　福岡市西区飯倉鎧田団地二四
森脇一夫　177　東京都練馬区富士見台三一一三一八

ヤ

八木毅　480-11　愛知県愛知郡長久手村大字長湫字城屋敷八一一五
矢島春美　401　山梨県大月市駒橋一一五一四一七
安河内君江　836　大牟田市大正町四丁目九六
安田章　603　京都市北区上賀茂高縄手五一
柳井己酉朔　167　東京都杉並区高井戸西三丁目三一七
築瀬秀司　063　札幌市北十三条西十五丁白樺通
山形大学付属図書館　690　山形市小白川町二四
山口クルミ　222　横浜市港北区篠原台町二四一一八
山口正　170　東京都豊島区北大塚三丁目一八一一八
山口秀夫　662　西宮市愛宕山一三一四〇
山口昌子　565　大阪府吹田市青山台二丁目六B一〇一一〇八
山口佳紀　171　東京都豊島区長崎五丁目八一一六
山崎栄一　354　埼玉県富士見市鶴瀬西三一一五一一三一三〇一
山崎馨　662　西宮市名次町五一二五
山崎良幸　780　高知市加賀野井一丁目二一一三
山田敏夫　466　名古屋市昭和区川名町四一八四

山田弘通 606 京都市左京区聖護院東町一
山田美保 615 京都市右京区桂坤町五〇—四
山田実 890 鹿児島市紫原一丁目四九—三
山梨大学付属図書館 400 甲府市武田四丁目四—三七
山本英二 338 与野市上落合二—四三
山本登朗 564 吹田市山手町二丁目三三—二
山本康裕 634 橿原市山之坊町五三七
山本利達 525 滋賀県草津市馬場町三八五

ユ

湯口誠一 606 京都市左京区松ヶ崎呼返町二—三
遊佐徳雄 031 青森県八戸市類家八戸東高校内

ヨ

横井博 963 福島県郡山市開成二丁目三七—二
横田きよ子 651 神戸市葺合区二宮町四—一四—六
横田健一 606 京都市左京区北白川東平井町二四—一
横田完 631 奈良市山陵町九四八
横田利平 634 橿原市内膳町二丁目六—三
横山英 439 静岡県小笠郡菊川町神尾一四三
横山寿夫 545 大阪市阿倍野区共立通二 東大谷高校
吉川貫一 658 神戸市東灘区本山北町四丁目二—一四
吉井巌 583 羽曳野市羽曳ヶ丘二丁目一—八
吉田和生 606 京都市左京区下鴨神殿町八
吉田金彦 600 京都市下京区万寿寺通烏丸西入御供石町三六〇
吉田修作 211 川崎市高津区千年三〇五
吉田哲夫 492 愛知県稲沢市堀之内町八三六
吉田義孝 463 名古屋市守山区小幡西新五五
吉田義視 733 広島市東観音町一四—七 観船荘三号
吉永登 664 伊丹市桜ヶ丘六丁目一四
吉成孝之 581 八尾市八尾木七四—二
吉原シゲコ 615 京都市右京区嵯峨大覚寺門前井頭町三
吉村栄吉 562 大阪府箕面市箕面二丁目九—一〇
米沢女子短期大学 992 山形県米沢市丸ノ内二丁目五—四八

リ

立教大学図書館文学部図書室 171 東京都豊島区西池袋三丁目
立命館大学文学部国文学研究室 602 京都市上京区河原町広小路
琉球大学付属図書館 903 沖縄県那覇市当蔵町三丁目一
竜谷大学文学部国文学研究室 600 京都市下京区七条大宮

ワ

若浜汐子　167　東京都杉並区桃井三―二―三
若林輝夫　581　八尾市志紀町西三丁目九―六六八
和歌山大学付属図書館真砂町分館　640　和歌山市真砂町一―一
早稲田大学教育学部国文学研究室　160　東京都新宿区戸塚町一丁目六四七
早稲田大学図書館　160　東京都新宿区戸塚町一丁目
和田嘉寿男　630　奈良市藤の木台三丁目一―四五〇
和田義一　915　福井県武生市国高町二―六三
和田幸子　336　埼玉県浦和市丈蔵一九三―一
和田義人　734　広島市東本浦町二―三三
渡瀬昌忠　336　浦和市内谷五三―九
渡部和雄　852　長崎市昭和町四五二―一三
渡辺護　223　横浜市北区日吉本町一七三　ニチモ日吉第一コーポ一〇六
渡辺泰　816　福岡市南区井尻美松町三三―七

追加

大島義信　379-21　前橋市小屋原町九〇八―二一三
大谷大学文学部国文学研究室　603　京都市北区小山上総町　大和荘
芳賀紀雄　606　京都市左京区吉田上阿達町三七洛水ハイツ東一〇
堀田勝郎　780　高知市福井町三三
宮本千史　176　東京都練馬区桜台二―二五
森満人　517-04　三重県志摩郡浜島町大字浜島

編輯後記

○巻頭論文は、吉永氏が昨年度の学会で講演されたもの。長谷川氏の論文は、有名な「風をだに……」の歌に新解釈を提出されたもので今後賛否の論議を呼ぼう。友松氏の論は、遣新羅使船の漂着した分間の浦に関する、実地に即した精しい論考。東野氏の論文は、平城宮址木簡の解読より得た貴重な成果。濱口氏のものは、新発見の萬葉集断簡の紹介で注目すべきものである。

○本誌も、今号で、年令でいえば米寿に当る八十八号を迎えた。しかし、本誌の、今後に期するところは大きい。お気付きの方もあるかと思うが、数号前から表紙のタイトル(王羲之書)を創刊当時のものにかえた。その引き締った感じは、創刊時代の精神につながるものである。

○今年度の学会の詳細は、予告欄にご案内の通りである。皆様お誘い合わせの上、ふるってご参加のほど、冀う次第である。

○最近また、町名地番等の異動が多くなった。巻末に会員名簿を添えたが、名簿の誤脱についてお気付きの際は、ご面倒ながら学会本部あてご一報頂きたい。（井手　至）

投稿規定

一、投稿資格は会員に限る。

一、内容は萬葉に関連する各分野の研究論文。

一、分量は原則として四百字詰原稿用紙三十枚程度（ただし「黄葉片々」欄は十枚以内）。

一、原稿は一切返却しない。採否決定は編輯部に一任のこと。

一、論文掲載の際には本誌三部を贈呈する。抜刷の作製（実費執筆者負担）は、あらかじめ希望のある場合に限る。

萬葉学会会則

一、本会は萬葉学会と称する。

一、萬葉研究者、愛好者は誰でも申込みによって会員となることができる。

一、会員の研究発表機関誌として季刊「萬葉」を発行する。

一、本会は随時、萬葉に関する見学旅行、文献の展観、研究発表会、講習会、講演会、図書の出版、その他を行なふ。

一、会員は、年額千六百圓の会費（誌代を含む）を年度初に納入する。

一、本会の事務は
大阪府吹田市千里山東三丁目
関西大学文学部国文学研究室内（郵便番号五六四）
において行なふ。

昭和五十年六月二十日印刷
昭和五十年六月二十五日発行

頒価四百圓
送料十五圓

編輯者　萬葉學會
大阪府吹田市千里山東三丁目
関西大学文学部国文学研究室内
（郵便番号五六四）
振替大阪二九一四七

発行者　大地
京都市北区小山堀池町二九
電話(〇七二)二一一一三六一

昭和五十年六月二十五日發行

萬葉

頒價 四百圓
送料十五圓